

石川県埋蔵文化財情報

第 35 号

巻頭図版 (漆町遺跡、矢田新遺跡)

平成27年度上半期の発掘調査から 調査部長 藤田邦雄..... (1)

発掘調査略報

北吉田ノシロタ遺跡 (志賀町) (2)

酒井バンドウマエ遺跡 (羽咋市) (4)

杉瀬ニシウラB遺跡 (津幡町) (6)

二日市イシバチ遺跡・三日市A遺跡 (野々市市) (7)

漆町遺跡 (小松市) (9)

矢田新遺跡 (小松市) (11)

加茂ボケ生水ウラ遺跡 (加賀市) (13)

平成27年度上半期の遺物整理作業 (14)

平成27年度環日本海文化交流史調査研究会の記録 (17)

はじめに 所長 福島正実..... (17)

貿易陶磁の入り口 ~ 鴻船館・博多の様相 ~ 田上勇一郎... (18)

山陰における初期輸入陶磁器の様相 濱野浩美..... (21)

中世前期における越前若狹の輸入陶磁器 阿部 来..... (24)

石川県 (能登・南加賀) の中世前期の輸入陶磁器 熊谷葉月..... (27)

北加賀における中世前期の輸入陶磁器 向井裕知..... (30)

富山県の中世前期の輸入陶磁器 越前慎子..... (33)

新潟における中世前期の輸入陶磁とその流通 春日真実..... (36)

東北地方日本海側の中世前期の貿易陶磁器 高桑 登..... (39)

総 括 伊藤雅文..... (42)

調査研究

石川県内遺跡出土ガラス資料の自然科学的研究①

— 材質・製作技法からみたガラス資料の再検討 — 関 晃史・中村晋也..... (44)

2016 年3月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

漆町遺跡

調査区遠景（北西から白山方面を望む）

漆町遺跡は、小松市北部を流れる梯川中流域左岸の沖積平野に立地する。昭和50年代に広く発掘調査が行われており、蛇行する旧梯川を縫うように点在した微高地上に、弥生時代以降の集落が展開している様子が確認されている。平成27年度調査区は、遺跡の北東端部に位置する。調査区は金屋町地内に所在しており、鋳物師の作業場などを意味する「金屋」の具体的な様子が、今回の調査区で確認できたことは、大きな成果といえる。

三足をもつ鉄鍋鋳型の出土

厚く堆積した廃滓層などからは、鉄鍋の鋳型片が多く出土しており、完形に近い鋳型も確認できた。写真は三足をもつ鉄鍋の鋳型で、手前の鋳型は、口径約45cm、底径約35cm、深さ約15cmを測る。梯川の旧流路に面する微高地上には工房と推定される礎石建ちの建物跡も確認しており、室町時代後期～江戸時代初頭の鉄鍋生産の実態を把握することができた。



調査区遠景（北西から白山方面を望む）



三足をもつ鉄鍋鑄型の出土

写真解説

矢田新遺跡

調査区俯瞰（東上空から）

矢田新遺跡は小松市矢田野台地の西部（標高9 m前後）に立地する15世紀代を中心とした遺跡である。遺跡からは東に霊峰白山を、西に柴山湯を望める。写真の奥の方に見えるのが柴山湯で、現在の柴山湯は干拓により縮小したが、干拓前は遺跡から岸まで約500 mであった。当時の人々はこの環境を生かし、周辺の水産資源を利用していたものと考えられる。

地下式坑3（北東から）

今回の調査では地下式坑を4基確認し、昨年度の調査と合わせると6基になる。写真の地下式坑は横穴の天井部を除去した状況であり、竪坑の平面形は円形を呈し、直径1.4 mを測る。横穴の平面形は長方形に近く、長さ2.4 m、幅1.9 m、深さ2.9 mを測り、比較的大型の規模を持つ。ほぼ完品の銅製の小皿が、横穴奥の床面から内面を下にして出土した。



調査区俯瞰（平成26年度撮影、東上空から）



地下式坑3（北東から）

平成 27 年度上半期の発掘調査から

調査部長 藤田 邦雄

平成 27 年度は、石川県教育委員会から 18 件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省が 5 件、鉄道・運輸機構が 1 件、県土木部が 11 件、県環境部が 1 件であった。本号では平成 27 年 4 月から 11 月にかけて当法人が実施した 7 遺跡の発掘調査の概要を紹介する。

酒井バンドウマエ遺跡（羽咋市）では、上下 2 層の遺構面を確認した。上層は中世の集落跡が主体で、掘立柱建物や井戸、堅穴状遺構などを検出した。また、下層では古墳時代から奈良・平安時代にかけての数棟の掘立柱建物や堅穴建物を確認し、調査区中央を東西に横断する川跡からは、多量の土器や木器が出土した。

漆町遺跡（小松市）の上層面では、中世後半から近世初期にかけての鉄鍋の鑄造に係る廃滓場などの遺構群を検出した。遺物は多量の鉄滓、鋳型片、炉壁片に混じり完形に近い鉄鍋の鋳型も確認している。また、8 月 30 日（日）に実施した現地説明会では 160 人の参加者があった。

矢田新遺跡（小松市）では主に中世後半の屋敷地を検出し、掘立柱建物、井戸、地下式坑、堀などを確認した。中でも深さが約 6 m の大型井戸、地下式坑の床面から出土した銅製小皿、幅約 4 m で東西方向に伸びる V 字状に掘られた薬研堀などが注目される。

北吉田ノシロタ遺跡（羽咋郡志賀町）では主に弥生時代から古墳時代の集落跡を確認した。堅穴建物や布掘建物、1 間×2 間の掘立柱建物など数棟を検出し、複数の柱穴から大型の礎板を確認した。遺物量は多く、調査区のほぼ全域に広がる包含層や旧河道から広範囲にわたって土器片が出土した。また、10 月 25 日（日）に実施した現地説明会では 52 人の参加者があった。

平成27年度発掘調査遺跡

No.	国鉄遺跡	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	時代	関係機関	関係事業
1	○	中カワナミマエダ遺跡	輪島市三井町中	3,000	縄文、古墳～中世	国土交通省	一般国道 470 号建設 奥越自動車道(輪島道路)
2	○	庄ノ内遺跡、津波宮庭寺	加賀市庄町地	5,800	弥生～中世		一般国道 8 号改修 (加賀区編)
3	○	酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市酒井町	3,340	古墳～中世	国土交通省	一般国道 159 号改修 (羽咋道路)
4	○	二軒 C 遺跡	小松市二軒町	3,300	弥生～中世		柳川改修
5	○	漆町遺跡	小松市金屋町	3,460	弥生～近世	国土交通省	北陸新幹線建設
6	○	八日市地方遺跡	小松市八日市町地方	1,700	弥生～中世		
7	○	加茂ゴウキ水ウラ遺跡	加賀市加茂町	670	弥生～近世	県土木部	地方道改修 (一) 片山山代線
8	○	矢田新遺跡	小松市矢田新町	1,520	古代～中世		地方道改修 南加賀道路 (覚津ルート)
9	○	小川 B 遺跡	白山市小川町	2,230	弥生		地方道改修 (主) 金沢美川小松線
10	○	福久遺跡	金沢市福久町	1,800	古代		地方道改修 金沢外環状道路 南側幹線 5 期
11	○	杉藤ニシウラ B 遺跡	河北郡津幡町杉藤	460	弥生		地方道改修 (一) 鹿谷津線
12	○	宇気ボウマワリ遺跡	春はく市宇気	1,030	古墳～中世		地方道改修 (一) 黒川橋山線
13	○	柳田原ノ目遺跡他 3 遺跡	羽咋市寺家町	1,630	弥生～中世		地方道改修 (主) 金沢田鶴浜線との里山道路
14	○	二日市イシバシ遺跡、三日市 A 遺跡	野々市市二日市町、三日市町	3,070	縄文～中世、古代～中世		広域河川改修 二機河川安取川
15	○	新庄サキノキダ遺跡	野々市市新庄 1 丁目	2,690	縄文、弥生、古代		広域河川改修 二機河川高橋川
16	○	北吉田ノシロタ遺跡	羽咋郡志賀町北吉田	2,100	弥生～中世		広域河川改修 二機河川末町川
17	○	金沢城下町遺跡 (東家六町 5 番地区)	金沢市東家六町	230	近世		急傾斜地崩壊対策工事 東家六町 1 号
18	○	安石川遺跡	野々市市安石	120	古代	県環境部	石川県水道用水供給事業
7 件		18 件		38,370			

北吉田ノシロタ遺跡

所在地 羽咋郡志賀町北吉田地内

調査期間 平成27年6月1日～同年11月24日

調査面積 2,100㎡

調査担当 端 猛 川畑 誠 神谷英生



調査位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺物が出土し堅穴建物や掘立柱建物、布掘建物など十数棟の建物を確認した。
- ・掘立柱建物などで柱の沈降を防ぐ様々な工夫が見られた。安定しない地盤に建物を建てた目的・意義が今後の検討課題。

北吉田ノシロタ遺跡は、羽咋郡志賀町北吉田地内に位置する弥生時代から中世の集落跡である。遺跡は、北吉田集落の北側を南西方向に流れる米町川の左岸に立地しており、周囲には水田地帯が広がる。米町川の河川改修に係る平成

25・26年度調査に続く第3次調査であり、第2次調査区の北東側を対象区域とした。遺構面が一部2面存在するという想定であったがその範囲が狭く、結果として次年度以降調査予定であった範囲も調査し、米町川河川改修に起因する本遺跡の発掘調査は今回で完了することとなった。

調査区のはほぼ全域で弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする遺物が出土し、堅穴建物や掘立柱建物、布掘建物、溝、土坑、小穴などの遺構を確認した。調査区南東の丘陵側では第2次調査と同様に多量の遺物を包含する河道と考えられる堆積が認められた。第2次調査では、この河道上面を含む第1面を弥生時代終末から古墳時代前期とし、第2面の一部の遺構は弥生時代後期後半に遡ると考えられていた。今回も同様に河道及びその周辺で2面以上確認されたが、部分的には間層が薄いところもあった。また、この間層からは古墳時代前期の土器も多く出土しており、堆積が短時間に起こった印象を持った。面の判断も含め各遺構の時期に関しては出土遺物の詳細な検討が必要となろう。

過年度の調査も含め本遺跡の掘立柱建物などは柱の据え方に特徴がある。建物の時期や規模に応じ大型の礎板や根がらみなど様々な工夫が見られる。いずれも柱の沈降を防ぐ若しくは、ずれを防ぐ目的と考えられる。つまり、それだけ柱が沈む、ずれる地であるということであろう。地盤が安定しなかったこの地での先人の苦労が偲ばれるが、なぜそこまでして建物を建て維持したのであろうか。その理由こそが本遺跡を理解する鍵となるのではと考えている。今後、資料の整理を進め検討したい。

(端 猛)



調査区位置図 (S=1/5,000)



調査区遠景（北から）



布掘建物（西から）



布掘建物柱穴



竪穴建物完掘状況（上が南西）



同左柱穴柱根・礎板出土状況

酒井バンドウマエ遺跡

所在地 羽咋市酒井町地内

調査期間 平成27年6月4日～同年11月24日

調査面積 3,340㎡

調査担当 立原秀明 矢部史朗



調査位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・調査区中央部で河道を検出し、兩岸において上下2層の遺構面を確認した。
- ・下層では竪穴建物、掘立柱建物、大型土坑、溝などからなる古墳時代から古代の集落を確認した。
- ・上層では掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸、溝などからなる中世の集落を確認した。

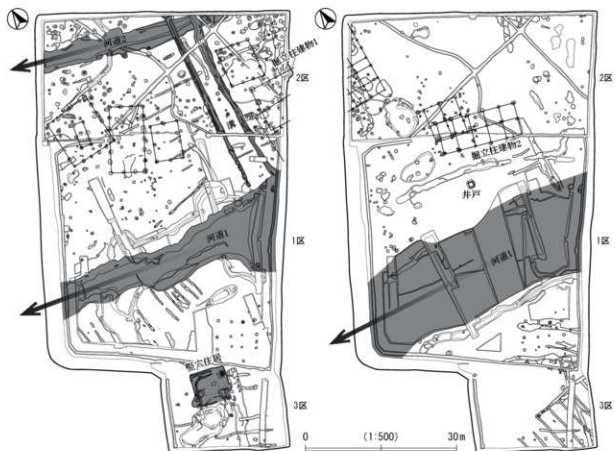
酒井バンドウマエ遺跡は、羽咋市北東部、碁石ヶ峰西麓の扇状地扇端部に位置する。尾根状の微高地、標高約4mを測る調査地は、東側を永光寺川が流れ、

西側の邑知潟にかけて広大な水田地帯が広がっている。調査は一般国道159号改築（羽咋道路）に伴うもので、本年度は1～3区の調査区に分割して発掘調査を行った。調査の結果、調査区中央部で碁石ヶ峰側から邑知潟側へ緩やかに流下する河道1を検出し、兩岸において上下2層の遺構面を確認した。

下層では古墳時代終末期から平安時代までの遺構と遺物を確認し、河道1右岸（1・2区）で掘立柱建物、大型土坑、溝などを検出した。掘立柱建物1は桁行3間（6m）×梁行2間（5m）以上の掘立柱建物であり、平面隅丸方形を呈する柱穴には、年代を特定できる遺物は確認できなかったが、多量の木材片を敷設してから柱を立てる特異な工法を観察することができた。また、同遺構の西側には同軸方位をもつ、道路の側溝とも見受けられる2条の溝を検出しており、切り合い関係から、建物と溝は9世紀前半の須恵器が出土した調査区北部の河道2が埋没した後の遺構の可能性が考えられる。河道1右岸の下層包含層は多量の礫が混入する最大30cmの厚みをもつ灰色砂質土層で、縄文土器も出土しており、洪水に伴い河道上流部からの土砂が流入したものと考えられる。河道1左岸（1・3区）では竪穴建物、大型土坑、畝溝などを検出しており、竪穴建物は大きさ4.5×5mを測る。平面方形を呈する建物内からは、北東隅で7世紀後半の土師器片を敷設したカマド跡を検出し、壁溝が一部で二重に設けられていたことから、少なくとも1回以上の建て替えがあることを確認した。同調査区の下層包含層では、河道1右岸のような土砂の流入は認められず、遺物量もわずかであった。

上層では一部で下層と同時期の遺構と思われるものもあるが、主に鎌倉・室町時代の遺構と遺物を確認し、河道1右岸（1・2区）では掘立柱建物、井戸、大型土坑、溝などを検出した。掘立柱建物2は桁行5間（10.5m）×梁行2間（4m）の総柱建物で、柱根の太さは12～15cmを測り、断面形は方形あるいは八角形を呈し、多くの柱根が残存していた。周辺の竪穴状遺構からは、14世紀代の土師器皿のほかに貿易陶磁器片も出土しており、居住者の階層の一端が窺われる。また、掘立柱建物2の南側区画溝付近では、縦板組欄柱横棧留め井戸が検出された。東部は遺構密度が低く、西部では柱根や柱痕跡を認める柱穴が密集していることから、集落は西側へ展開するものと思われる。河道1左岸（1・3区）では溝や畝溝、小穴を検出するにとどまった。河道1から出土した漁労具の土鎌、鋤や田下駄などの農具は、邑知潟での漁業や周辺の三角州低地での農業といった集落の生活基盤を示す資料であると考えられる。

（矢部史朗）



下層遺構平面図 (S=1/500)

上層遺構平面図 (S=1/500)



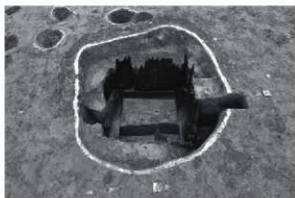
2区下層 掘立柱建物1 完掘状況 (北から)



3区下層 竪穴住居 完掘状況 (西から)



2区下層 掘立柱建物1 柱穴土層断面 (西から)



1区上層 井戸 検出状況 (南から)

杉瀬ニシウラB遺跡

所在地 河北郡津幡町杉瀬地内

調査期間 平成27年5月22日～同年7月23日

調査面積 460㎡

調査担当 熊谷葉月 瀧野勝利



調査位置図 (S=1/25,000)

杉瀬ニシウラB遺跡は津幡町中央の丘陵裾南端付近、現・津幡川とその支流である倉見川に挟まれた微高地上に立地する。約100m南東の微高地上には、古代・中世の杉瀬ニシウラ遺跡が所在する。

調査は県道荻谷津幡線改築事業に伴うもので、新発見の遺跡である。

調査区東半では、かつて蛇行していた津幡川が近代以降に埋め立てられた痕跡を検出した。

調査区西半では、幅約5m、深さ1.5～2.0mの河道を検出した。川底は北に向かって下方へ急傾斜しており、流木の堆積がみられた。調査区の北側に存在したと思われる本流への合流部付近であった可能性がある。上層では奈良・平安時代を中心とした須恵器・土師器のほか、珠洲焼、鍛冶滓などが、中・下層では主に弥生時代後期の土器が出土した。

調査区内では、他の遺構が見られず、また河道からの出土土器も比較的小片で脆いものが多く、上流から流れてきたものがほとんどであると思われる。集落の中心は調査区より南側の上流付近にあったものと推定される。(瀧野勝利)



遺跡遠景 (東から)



調査区全景 (上が北)



河道 (北西から)

二日市イシバチ遺跡・三日市A遺跡

所在地 野々市市二日市町・三日市町地内
調査面積 3,070㎡

調査期間 平成27年4月21日～同年11月9日
調査担当 岩瀬由美 関 晃史



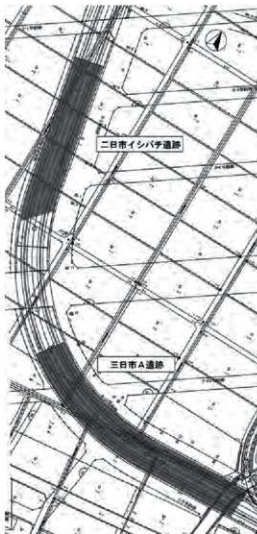
調査位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・二日市イシバチ遺跡では弥生時代～室町時代の複合遺跡を確認し、弥生時代終末期の布掘り建物や中世の区画溝などを検出した。
- ・三日市A遺跡では古代～中世の複合遺跡を確認し、主に中世の溝を検出した。

二日市イシバチ遺跡はJR野々市駅から南西に約0.5kmのJR北陸本線南北両側に広がっており、これまでの調査で主に弥生時代後期後半～古墳時代初頭、及び中世の遺跡であることが明らかになっている。昨年度に引き続いての調査であり、昨年度調査区より南側の1,270㎡を調査した。弥生時代～古墳時代の遺構は北半部に分布が見られ、調査区北端付近で弥生時代終末期頃の布掘り建物を1棟検出した。1回の建て替えを確認している。中世の柱穴や堅穴状遺構も北半部に集中するが、それらで構成される屋敷地などを区画する溝はほぼ全域で検出されたことから、調査区の東西にも屋敷地の存在が想定された。南北に真っ直ぐ延びる区画溝からは馬の歯がまとまって出土している。

三日市A遺跡は二日市イシバチ遺跡の南東部に隣接して広がる遺跡である。同一事業に起因した平成18、19年度の調査区に挟まれた1,800㎡を対象とした。遺物の出土が僅少で、明確な時期が押さえられなかったものの、切り合い関係等から古代後半と推定される畦溝群と、中世の溝を検出した。幾度かの掘り直しが観察される2条の溝が調査区を東西に横断する形で併走しており、そのうちの南側の溝については最初期の段階で連続したピットが底面に掘削されていた。覆土に硬化が認められたことから波板状凹凸遺構と判断され、道として利用されていたと推定される。(岩瀬由美)



調査区位置



遺跡完掘状況 (二日市イシバチ遺跡 北半)



区画溝完掘状況 (二日市イシバチ遺跡)



遺物出土状況 (二日市イシバチ遺跡)



布張り建物完掘状況 (二日市イシバチ遺跡)



遺跡完掘状況 (三日市A遺跡 東半)



遺跡完掘状況 (三日市A遺跡 西半)



畦溝群 (三日市A遺跡)



溝完掘状況 (三日市A遺跡)

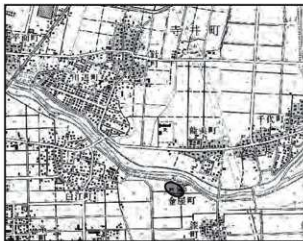
うるしまち
漆 町 遺 跡

所在地 小松市金屋町地内

調査期間 平成 27 年 4 月 23 日～同年 11 月 13 日

調査面積 3,460㎡

調査担当 中森茂明 宮永正則 西田昌弘 横山純子



調査位置図 (S=1/25,000)

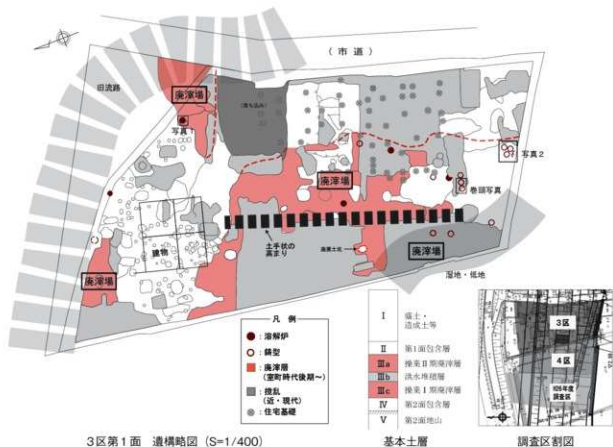
調査成果の要点

- ・ 3区で上下2層の遺構面を確認した。
- ・ 第1面では、ほぼ完形の鉄鍋鋳型と工房の確認によって、室町時代後期～江戸時代初頭における鋳造の実態が確認できた。
- ・ 調査区は金屋町地内に位置しており、今回確認できた「金屋」との関連性をうかがわせる。
- ・ 第2面では、古墳時代前期の堅穴建物のほか、室町時代の屋敷地などを画する区画溝や多数の井戸を確認した。

漆町遺跡は、小松市北部を流れる梯川中流域左岸の沖積平野に立地する。土地改良事業などに係り、昭和50年代に広く発掘調査が行われ、蛇行する旧梯川を縫うように点在した微高地上の集落様相が確認されている。平成26年度からは、梯川改修事業に係り調査を実施しており、今年度は遺跡北東端部の調査を行った。調査区では、宅地や水田下の標高3m前後で遺構面が検出でき、梯川の旧流路などの影響で、弥生時代終末期～江戸時代の遺構が上下2面となる3区と、1面のみ確認できた4区からなる。

3区上面（第1面）では、室町時代後期から江戸時代初頭（16世紀～17世紀前半）における、鉄鍋生産を中心とした鋳造の実態を把握することができた。鋳物の製造過程で出る大量の鉄滓や鋳型片、溶解炉の一部、鑪の羽口などが廃棄された厚い堆積層を確認しており、口径23～45cm程度で、器形が把握できる鉄鍋鋳型も多数出土した。また、梯川の旧流路に面した微高地では、工房と推定される礎石建ちの建物跡を確認しており、燃料や素材の搬入、鋳型製作や三足がつく鉄鍋の生産、商品の運搬などを担っていたものと思われる。このような梯川の水運を利用した盛んな鋳物生産は、室町時代に大川遺跡など下流域の町場で商業活動が活発となり、生活に必要な鉄鍋の需要が高まってきたことを背景にしたものと想定できる。今回、鋳物師の作業場などを意味する「金屋」の具体的な様子を、調査地の金屋町地内において初めて確認できたことは、大きな成果といえる。

3区下層（第2面）と4区の調査では、古墳時代前期の堅穴建物、平安時代～室町時代の井戸、屋敷地などを画する室町時代の区画溝などを確認した。古墳時代前期の堅穴建物は、壁溝のみの検出で、規模は長軸5m、短軸4.6mを測る。壁溝は南西で開口部をもち、底面と断面には差し込まれた板材の痕跡が確認できた。室町時代の区画溝はコの字状を呈する幅2～3m、深さ80cm前後の溝と、その内側にL字状を呈する幅1.5～2m、深さ60cm前後の溝を確認した。いずれも北側は落ち込みへと繋がっており、14世紀後半～15世紀頃の土師器皿などが出土した。しかし、両溝が並行して機能していたのか、あるいは付け替えによるものかについては、今後の検討を要する。（西田昌弘）



3区第1面 径70cm規模の溶解炉 (東から)



3区第1面 鉄鍋鑄型検出状況 (北西から)



3・4区第2面 壁溝に板材痕跡をもつ竪穴建物 (東から)



3区第2面 室町時代の区画溝 (南西から)

矢田新遺跡

所在地 小松市矢田新町地内

調査期間 平成27年4月27日～同年10月5日

調査面積 1,520㎡

調査担当 白田義彦 武部修一



調査位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

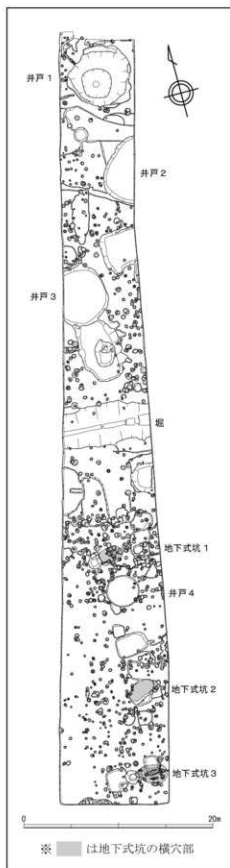
- ・今回の調査区は東側の台地上と西側の台地下に分かれ、台地上の調査区では室町～戦国時代の遺構を検出し、台地下では縄文時代晩期～弥生時代初めの遺構を検出した。
- ・室町～戦国時代の掘立柱建物、井戸、土坑、堀、地下式坑などを検出した。大型の地下式坑から銅製の小皿が出土した。
- ・室町～戦国時代の陶磁器、土師器、石製品、金属製品などが出土した。石製品は比較的多く出土しており、石臼（茶臼含む）、石鉢、行火、砥石、硯等、種類も多い。

今年度の調査は昨年度調査区に隣接するA区とB区、西へ約150m離れたC区で行い、A・B区は台地上に立地し、C区は台地下になり、標高差は約65mである。A・B区では主に室町～戦国時代の遺構を検出し、C区では縄文時代晩期～弥生時代初めの遺構（1×2間の掘立柱建物と土坑）を検出した。

B区では井戸を4基検出し、井戸底を確認できたのは、井戸1のみで深さは6.4mを測る。桶を井戸枠とし、その直径は66cmであった。井戸4は円形で、直径3.4mを測り、埋土から大量のタニシの殻が出土した。地下式坑はA区で1基、B区で3基検出した。B区の地下式坑2は天井部が崩落しており、検出時の平面形の把握が難しかったもので、竪坑の位置が不明瞭であるせいか、完掘時の平面形はそら豆の形と似ている。その規模は比較的小さく、長さ3.1m、幅1.5m、床面までの深さは1.7mを測る。堀もB区で検出し、幅4.4m、深さ1.8mを測る薬研堀であり、土層の堆積状況から、空堀と考えられる。これらA・B区の遺構からは15世紀代に比定できる遺物が多く出土した。(白田義彦)



調査区位置図 (S=1/2,500)



井戸 1 (深さ 3 m まで掘削した状況)



井戸 4 のタニシ出土状況



堀 (完掘状況)



地下式坑 2 (完掘状況)

加茂ボケ生水ウラ遺跡

所在地 加賀市加茂町地内

調査期間 平成27年5月7日～同年6月10日

調査面積 670㎡

調査担当 澤辺利明 瀧野勝利 武部修一



調査位置図 (S=1/25,000)



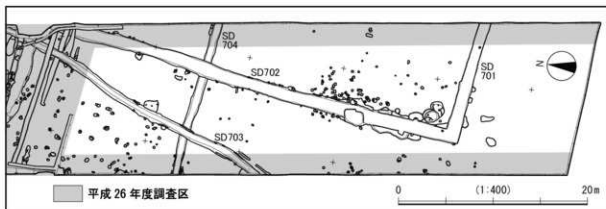
SD702・703 完掘状況 (北から)

加茂ボケ生水ウラ遺跡は石川県の南西端を占める加賀市にあって、市域北部に広がる江沼平野の中ほど、加茂町南側の水田中に位置する。

発掘調査は一般県道片山津山代線バイパス工事に伴うもので、昨年度に続く第2次調査である。昨年度は今回調査区の両側（水路敷設箇所）および北側延長約180m区間の発掘調査を行い、弥生時代末～古墳時代前期、古代、中世の集落跡を確認した。今年度は残る車道部分、延長53mの調査を実施した。調査箇所は遺跡南端部にあたり、周辺の標高は11m前後を測る。

調査の結果、直線的に伸びる水路2条（SD703・704）と、中途で直角に曲がりL字型をなす溝1条（SD701・702）等を確認した。

箱堀りの水路は幅約1m、深さ70cm前後を測る。L字型溝は幅約1.2m、深さ50cm前後、水路と同様の箱堀り形をなし、区画整理前の畑区画と方位を同じくすることからみて、耕作地周囲に巡らされた排水等を目的とする溝の可能性がある。これらの遺構からは平安時代の須恵器、土師器、中世の陶器、近世以降の磁器がわずかに出土したのみであり時期比定は困難であるが、その形状や遺存状況、覆土の観察等から近世以降の所産と推定される。（澤辺利明）



調査区全体図

平成 27 年度上半期の遺物整理作業

国関係調査グループ

上半期は南新保 E 遺跡（金沢市 平成 26 年度調査）と一針 C 遺跡（小松市 平成 26 年度調査）、漆町遺跡（小松市 平成 26 年度調査）を整理した。南新保 E 遺跡に関しては県関係調査グループの報告をご覧いただきたい。

一針 C 遺跡は弥生時代～中世の集落遺跡である。昨年度も土器の記名・分類・接合と一部の土器の実測を行っており、今年度は土器・金属器類の実測と、石製品の記名・分類・接合を行った。土器の実測に関しては、昨年度と同様、弥生時代から中世の遺物を、金属器では、鉄釘、袋状鉄斧、包丁（木製の柄とともに出土）、銅銭、鉄滓を実測している。石製品の記名・分類・接合では、製品にはなっていないが、複数の遺構から出土した石の破片同士が接合し、製品になっているものの中にも同一の原石を使用したと思われるものもあった。

今回整理を行った漆町遺跡は、以前にも広く調査されている古代・中世の集落遺跡の一部である。平成 26 年度調査に引き続き平成 27 年度にも大がかりな調査を行っており、平成 26 年度調査では、全体からみると比較的少量の遺物が出土したに過ぎない。記名・分類・接合、実測・トレースの作業を行ったが、実測・トレースは土師器、須恵器、陶磁器等の土器類と石製品、金属器にとどめている。遺物の大半を占める炉壁、鉄滓、鋳型（鍋の耳と思われるものが多い）等の鋳造関連品の実測は、来年度以降平成 27 年度調査分の遺物とともに行う予定である。（横山そのみ）



石器の記名・分類・接合（一針 C 遺跡）



石器の選別（一針 C 遺跡）



剥片の接合（一針 C 遺跡）

県関係調査グループ

上半期は、南新保E遺跡（金沢市 平成26年度調査）、二所宮サンマイダ遺跡（志賀町 平成26年度調査）、古府ヒノバンデニバン遺跡（七尾市 平成25年度調査）、加茂ボケ生水ウラ遺跡（加賀市 平成27年度調査）、細滝神社遺跡（かほく市 平成26年度調査）の出土品整理作業を行った。

南新保E遺跡は、県関係調査グループ、特定事業調査グループと合同での木器実測から始まり、記名・分類・接合、実測・トレースを行い、続いて二所宮サンマイダ遺跡の記名・分類・接合、実測・トレースを行った。

次に古府ヒノバンデニバン遺跡に入った。ここでは、約4mの木樋及びその蓋の実測を行った。専用のケースから出すのに6人以上の人手が必要で、室内に入れることもできず、屋外での実測となった。風、光と戦いながら木樋が乾かないようにジョウロで水をかけている時間の方が長かったのではと思うほどで、現場で図面を録っている人たちはすごいと思った。他にも墨書や転用の須恵器、木筒の実測・トレースを行った。

加茂ボケ生水ウラ遺跡は、昨年に引き続きだが、実測点数6点と少なく、細滝神社遺跡に入った。ここでは弥生土器が多く出土していたが、土圧のためか歪みが著しく接合がとても難しかった。

（村上泰子）



木器の実測（南新保E遺跡）



土器の実測（二所宮サンマイダ遺跡）



木器の実測（古府ヒノバンデニバン遺跡）



石器の実測（細滝神社遺跡）

特定事業調査グループ

上半期は、南新保E遺跡（金沢市 平成26年度調査）、金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）（金沢市 平成26年度調査）、戸水ホコダ遺跡（金沢市 平成26年度調査）、相坂遺跡他1遺跡（志賀町 平成26年度調査）、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町 平成25・26年度調査）の整理作業を行った。

南新保E遺跡は、国関係調査グループ、県関係調査グループと合同で、大型木製品の実測・トレースを行った。

金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）では、記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。土器は小片が多く、石器は大型品を含め3点実測・トレースを行った。

戸水ホコダ遺跡では、記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。土器の他に木製品2点実測・トレースを行った。金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）と戸水ホコダ遺跡は、実測遺物が少なく2班に分かれての作業となった。

相坂遺跡他1遺跡では、記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。土器、石器、金属器、木製品の実測・トレースがあり、石鏃やその剥片が多くリング・フィッシャーを書くのに時間がかかった。

北吉田ノシロタ遺跡では、土器・大型木製品の実測・トレースを行った。土器は甕、壺、高坏、器台が多く、調整等の残りが良く書き応えのある遺物が多かった。（小島紀子）



木製品の実測（本多氏屋敷跡地区）



石器の実測（相坂遺跡他1遺跡）



土器の実測（北吉田ノシロタ遺跡）

平成 27 年度環日本海文化交流史調査研究会の記録

はじめに

センター所長 福島 正実

環日本海文化交流史調査研究会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものです。本研究会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成 12 年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、平成 27 年度で 16 回目の開催となりました。

本年度は日本海沿岸各地域から出土した平安時代末～鎌倉時代の初期輸入陶磁器の集成を行い、出土する遺跡の性格やその流通について明らかにしたいと考え、テーマを「中世前半における輸入陶磁器とその流通」としました。資料の集成や報告にあられた皆様にご感謝申し上げます。

- 1 主催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等 90 名
- 4 内容及び日程

- ・事前の打合 10 月 22 日（木）午後 3 時～
- ・調査研究会 10 月 23 日（金）午前 9 時～午後 4 時 30 分

地域別報告

- 九州地方（福岡県） 田上勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）
- 山陰地方（鳥取県） 濱野 浩美（米子市教育委員会）
- 北陸地方（福井県） 阿部 来（勝山市教育委員会）
- 北陸地方（石川県） 熊谷 葉月（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
- 北陸地方（石川県） 向井 裕知（金沢市文化財保護課）
- 北陸地方（富山県） 越前 慎子（公益財団法人富山県文化振興財団）
- 北陸地方（新潟県） 春日 真実（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）
- 東北地方（秋田県） 高桑 登（公益財団法人山形県埋蔵文化財センター）

討論

- ・資料見学会 10 月 24 日（土）午前 9 時 30 分～正午

調査研究会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究会テーマ）	記録の掲載（石川県埋蔵文化財情報）
第 1 回	H13.2.23	環日本海文化交流史の現状と課題	
第 2 回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第 8 号
第 3 回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第 10 号
第 4 回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える	第 11 号
第 5 回	H16.10.29	古代日本海城の港と交流	第 13 号
第 6 回	H17.10.28	中世日本海城の土器・陶磁器流通－一粟・壺・摺鉢を中心に－	第 15 号
第 7 回	H18.10.27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－	第 17 号
第 8 回	H19.10.26	日本海城における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－	第 19 号
第 9 回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第 21 号
第 10 回	H21.10.23	日本海城の土器製造－その系譜と伝播を探る－	第 23 号
第 11 回	H22.10.29	近世日本海城の陶磁器流通－肥前陶磁器から探る－	第 25 号
第 12 回	H23.10.28	中世日本海城の墓標－その出現と展開－	第 27 号
第 13 回	H24.10.26	弥生時代の墓	第 29 号
第 14 回	H25.10.25	舟と水上交通	第 31 号
第 15 回	H26.10.24	江戸時代の墓	第 33 号
第 16 回	H27.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	本号（第 35 号）

貿易陶磁の入り口 ～鴻臚館・博多の様相～

田上 勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

はじめに

博多湾沿岸地域は中国大陸・朝鮮半島に近いという地理的条件より、古くから対外交流の最前線として繁栄してきた。それは江戸幕府により鎖国政策が開始されるまで続いた。

1. 鴻臚館

「日本書紀」持統天皇2（688）年に初出する「筑茶館」が鴻臚館の前身である。後に「鴻臚館」と名を改め、大宰府の出先施設として、外交使節や外国商人を迎えた迎賓館である。

1987年、平和台野球場外野スタンドの改修工事に伴う調査で鴻臚館の遺構が確認され、それ以降、福岡市により調査が続けられている。調査ではおびただしい数の越州窯系青磁を中心とした貿易陶磁が出土している。特徴的なのは体部外面露胎で胎土に黒斑が多く入る粗製の青磁が多く見られることである（第2図）。その中には重ね焼きの目土が付いたままの物があり、窯から直接運ばれたもの考えられている。福建省の懷安窯産とされるこれらの粗製青磁は北部九州で消費され、日本全国の流通には乗らなかった（鄭・栗・田中1999）。鴻臚館からは11世紀中頃以降遺物が出土しなくなり、この頃廃絶したと考えられる。

2. 博多

鴻臚館廃絶後、中国の商人は東へ2.5kmの博多に「唐房」「大唐街」というチャイナタウンをつくり貿易拠点とした。そのことを示すのが博多遺跡群である。1977年地下鉄建設に伴う調査で中世の遺構・遺物が良好に残っていることが確認され、現在まで200地点以上が調査された。

（1）出土遺物にみる中世前期博多の特徴

中世前期において博多は国内最大の国際貿易都市であった。そのことを示す考古学的特徴を以下に示す。

貿易陶磁の大量出土

かつて破片数を計測した結果を示すと（池崎1984）、地下鉄店屋町工区（A・B区）では調査面積644㎡で30,279点、地下鉄祇園駅出入口2・3区では440㎡で3,794点、4次調査では1100㎡で34,302点、10次調査では54㎡で801点という数値が示されている。1㎡あたりに直すとそれぞれ47.0、86.3、12.1、148点であり、他の遺跡とは桁違いの出土量である。

多種多様な陶磁器

耀州窯・連江魁岐窯・黄岩窯・高麗青磁・初期龍泉・同安窯系青磁・磁州窯系陶器・小物など他地域ではあまり見られない多種多様な貿易陶磁が出土している（第3図）。小物については中国商人の生活用品として持ち込まれた物であろう。

陶磁器の分類については大宰府分類（横田・森田1978・太宰府市教育委員会2000）が広く使われ、博多においては博多分類（福岡市教育委員会1984）が使われているが、その分類に取まらない物が多い。

陶磁器大量一括廃棄

破損品や火災にあった数百点もの陶磁器を一括廃棄した遺構がある（第4図）。商品の荷揚げ地や中国商人の住居・店舗・倉庫に比定されている。

墨書陶磁器

中国産の白磁や青磁の高台内個や、中国産陶器の底部に漢字や花押とみられるものを墨書きしたものがあ（第5図）。中国人名と思われる「王」、「柳」、「李」や「(中国人名)+綱」、「綱」などがよ

く見られる。「綱」は中国人商人＝「綱首」のことと思われ、これらは積み荷の所有者をメモ書きしたものと考えられる。花押も同じ役割をしたものであろう。また、数字や「十口内」など、数量を記したのも見られる。これらは中国で荷を積み込むとき、識別として記されたもので、輸入後、墨書があるために商品とならずに博多で消費されたと考えられている。

コンテナ容器

中国陶器の大型壺甕類が多数出土する。これらの陶器は陶器そのものではなく、その中に入れられた内容物が商品として輸入されたと考えられ、容器としての壺甕類は博多にとどまったものと思われる。また、博多の井戸欄に使用されている結桶についても、国内で結桶が使われるのが14世紀からといわれているので、中国からコンテナ容器としてもたらされたものを転用していると考えられている。一括廃棄遺構で見られた一辺1m四方の木枠も輸入貨物のコンテナ容器の可能性はある(大庭1999)。

寧波系瓦

「花卉文瓦」「押圧波状文瓦」と呼んでいる瓦で、日本の瓦の系譜からはつながりが追えないものがある(6図)。類似の瓦は中国の寧波で見つかり、最近同型の軒丸瓦も発見された。3D計測や胎土分析の結果から寧波からの輸入品であることが確かめられた。

(2) 出土陶磁器からみた貿易の変化

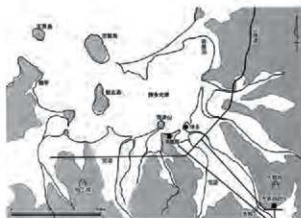
11世紀後半、博多遺跡群から出土する貿易陶磁の量が増大する。この時期、中国からもたらされたのは福建省と広東省で焼かれた白磁が中心である。博多南西部の波打ち際は大量の白磁が集積した状態で発見された(14次)。荷揚げ時に破損した物をまとめて捨てたものと見られている。また、付近では木箱状の中に600個体以上の白磁・陶器が廃棄されていた(56次SK0281)。また、火災にあった品をまとめて廃棄した土坑も発見されている(79次1827号遺構)。このような大量廃棄が見られることから、当時の港や中国商人の居住地はこの付近にあったものと考えられている(大庭2001)。

12世紀後半には龍泉窯系青磁や同安窯系青磁が大量にもたらされるようになる。白磁は広東省産が見られなくなり福建省産のものがほとんどになる。この頃の大量廃棄はやや内陸側に寄っていく(79次2714号遺構・祇園駅2・3号出入口1号土坑)ことから、次第に中国人商人の居住地が広がり、日本人と混住していったと考えられる。(大庭2001)。

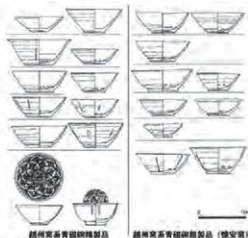
13世紀になると、陶磁器の出土量は減少し、大量廃棄遺構も見られなくなる。また、遺物が多く出土する地点も、前代のような港や中国商人の屋敷があった博多南西部ではなく、東側の聖福寺周辺に集中している。この時期を代表する龍泉窯の蓮弁文青磁碗が全国各地で発見されるのと対照的である。このことから、商品は商人の手元にとどめられることなく、公家や武家、寺社といった権門等、購入者に直接渡ったと見られる。

【引用・参考文献】

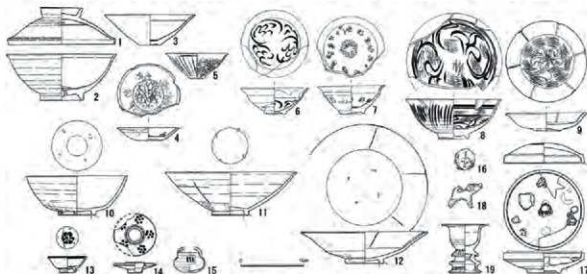
- 池崎謙二 1984 「博多出土貿易陶磁器の組成について」『貿易陶磁研究』NO4 日本貿易陶磁研究会
大庭康時 1999 「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』448 日本史研究会
大庭康時 2001 「博多綱首の時代」『歴史学研究』756 歴史学研究会
亀井明徳 1986 「日本貿易陶磁史の研究」同朋舎出版
太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡XV」太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会
鄭国珍・栗建安・田中克子 1999 「福州懷安窯貿易陶磁研究」『博多研究会誌』第7号 博多研究会
福岡市教育委員会 1984 「博多出土貿易陶磁分類表」『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会
横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館



第1図 古代の博多湾周辺

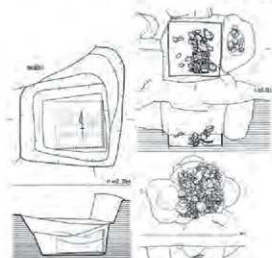


第2図 越州系青磁碗 精製品と粗製品 (1/8)



1-4:高麗青磁 5:越州系青磁 6:遠江型破家青磁 7:黄砂系青磁 8・9:加那羅風・河安系系青磁 10-15:濠洲系高麗陶器 16-17:広東白磁 18・19:景徳鎮青白磁

第3図 多種多様な博多出土の陶磁器 (1/6)



左: 56次5K0281
右: 築港線1次21号井戸
右下: 79次1827号遺構

第4図 一括大量廃棄土坑 (1/80)



第5図 墨書陶磁器 (1/6)



第6図 寧波系瓦 (1/8)

山陰における初期輸入陶磁器の様相

濱野 浩美（米子市教育委員会文化課）

はじめに

山陰地方の陶磁器研究については、1970年代から鳥取島根両県において国庁付近の調査が行われたことにより中世資料が増加、2002年には日本貿易陶磁研究会研究集会中国大会が開催された。その後、益田市沖手遺跡、中須西原遺跡・東原遺跡の発見により日本海側の港湾遺跡の調査が進められ、中世期の日本海流通の状況が垣間見えてきた。また、鳥取県内では大山寺僧坊跡の調査が行われ、14世紀後半から15世紀後半の良好な資料を提示できた。しかしながら、初期貿易陶磁の様相については出土資料が少ないこともあり、十分な検討までは至っていない。そこで、比較的平安時代から中世前半にかけての遺構が検出されている鳥取県（因幡・伯耆）、島根県（出雲・石見）の国府城を中心とした貿易陶磁器の出土様相を中心に検討を行ってみた。

各地の様相

（因幡）

因幡国府は鳥取市国府町中郷、庁、法華寺、国分寺の周辺が想定されている。昭和47～54年度の8次にわたる調査の結果、10～11世紀に大規模に土地造成を行い古代以来の土地の区画が造成されたことが判明した。遺構は古代に引き続き中郷や庁地域が中核となるようで、当該地に屋敷地が広がっていたと思われる。この状況は中世後期に守護所が天神山に移っても屋敷地は続いていたようである。

（伯耆）

伯耆国庁跡では、古代の遺構検出とともに11世紀以降の遺物の出土も増加しており、国庁を代表とする古代の官衙関連遺跡は形・性格は変化していったとしても、12世紀代までは存続すると思われる。また国庁周辺の丘陵縁辺部では11世紀以降になり、掘立柱建物、井戸、墓などが構築されるようになり、古代よりも人間活動は活性化しており、国庁跡付近から周辺域に拡散していく様相が推察される。

（出雲）

出雲国府跡では、昭和43年から発掘調査がおこなわれ、国庁の政庁や国司館などの建物跡が発見された。10世紀後半以降、当該地中心域では遺構がほとんど検出されていないのに対して、遺跡北東部では遺構が増加する（第1図）。特に日岸出地区における出土陶磁器は、出雲国府跡出土陶磁器総数の56%を占めており、出雲府中を中心とした物資の集積地と推定されることから、国府城東側に中世の出雲府中に係る建物の存在が推定されている。また大橋川から中海に通じる水運の要衝である馬橋川の河口部に位置する石台遺跡では11・12世紀を中心とした遺物が出土していることから、出雲国府への意宇川を介した水運の拠点的な場所であったと推察されている。出雲国府城のこれらの遺跡を俯瞰すると、輸入陶磁器類がまとめて出土している遺跡は、意宇川下流域から茶臼山北麓一帯に点在しており、古代の国府城に比べ広範囲に広がっていることがわかる。また、出雲国府跡では、貿易陶磁器類の出土比率が非常に高く、国府跡5,329点、天萬谷遺跡379点、出雲国造館跡203点、石台遺跡129点であり、その内訳は白磁が大半で、特に石台遺跡や出雲国府跡日岸出地区では広東系白磁、中国産陶器盤・壺などの特殊品も出土している（第2・3図）。この様相は石見府中の古市遺跡と共通する。

(石見)

島根県浜田市東部の国府城は、中世期には石見を代表する武士の益田氏との関連が深い地域で、台地上に国分寺・尼寺が所在するのに対し、中世遺跡である古市遺跡・横路遺跡などは下府川沿いの沖積平野付近に位置している。古市遺跡では古代前期から14世紀前半の遺物が大量に出土しており、遺物総数の約10%が中世前期の貿易陶磁である。この様相は博多や大宰府に近い組成を示し、「古市」の地名から石見府中の市場、物産集中地とも言われている。また古市遺跡から500m下流の対岸に位置する横路遺跡では、11世紀中葉～12世紀前半の遺構と多量の貿易陶磁が出土している。このうち、土器土地区域では建物数棟を区画する浅い溝を持つ。所見では中世前期に河川が安定したことにより、川際の影響の少ない場所に造られた「小規模な町」と考えられる(榊原1997)。このように下府川に隣接して、中世前期の集落が形成されているが、これは水運を利用した交易の拠点として下府川流域の沖積低地が開発され、古市遺跡では平野の拡大を行い、横路遺跡では新たなまちが形成されたと考えられる。これは因幡、伯耆国府城において古代以来の国府城が国人、在庁官人の屋敷として継続して営まれていることは対照的な様相を呈する。

また、益田川・高津川下流域では、中世前期には古益田湖に面して沖手遺跡を中心とした大規模な拠点集落が形成される。南北朝期になると、港湾機能は益田河口に近い中須西原遺跡・東原遺跡に移り、両遺跡では14世紀から15世紀にかけて中国陶磁や朝鮮陶磁の出土が増加し、特殊品、威信財なども出土する。すなわち、益田川・高津川両河川の河口部に点在する港湾遺跡は、中世前期から後期にかけてその機能を維持しながら、拠点が変遷していくことが判明している。さらにこの動きは中・上流域の中世遺跡の変遷とも連動することも確認できる。

おわりに

山陰地方の初期貿易陶磁器の様相について、大変雑駁に述べてきた。10世紀中葉から12世紀の中でも11世紀は政治権力の交代期にあたり、国衙権力が衰退し、地域固有の権力が台頭し始める。この状況の中で、初期貿易陶磁器が出土する遺跡は当然権力者の支配が及んでいる地域である。山陰地方ではこの時期、国府城周辺において、地域をずらしながらも遺物が出土しており、中世のある時期までは、当該地域に古代以来の権力基盤を有する勢力が存在したものと考えられる。その中で出雲国府跡口岸出地区や、石見の古市遺跡、そして沖手遺跡は日本海交易における物資集積地の機能を有していたと考えられる。しかしながら、それ以外の地域における詳細な状況については、出土資料も点的で一括資料が少ないこともあり、十分な検討までは至らず、先行研究をなぞるものとなってしまった。鳥取県では、現在山陰道関連の遺跡の調査が進められており、今後それらの遺跡についても考察していくことで、当該期の様相についてもさらなる検討が進められればと思う。

今回の報告及び資料作成にあたり、西尾克己、佐伯純也氏のご教示、ご協力を得ました。

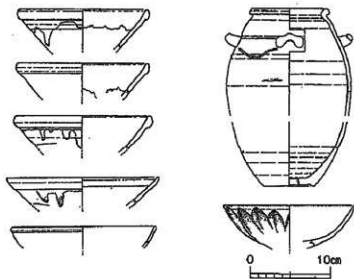
【引用・参考文献】

- 榊原陽介ほか 2013 「史跡出雲国府跡-9総括編」(風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書22, 島根県教育委員会
片岡詩子・廣江耕史 1986 「石台遺跡」島根県教育委員会
佐伯昌俊 2012 「中世港湾遺跡からみた益田地域の流通」[中近世土器の基礎研究24] 日本中世土器研究会
榊原博英 1997 「横路遺跡(土器土地区)」島根県浜田土木建築事務所, 島根県浜田市教育委員会
第36回日本貿易陶磁研究会研究集会山陰大会資料集 2015 「中世山陰と東アジア」日本貿易陶磁研究会
西尾克己・廣江耕史 2015 「遺跡から見た府中」[松江市史研究]6号(松江市歴史叢書8)松江市



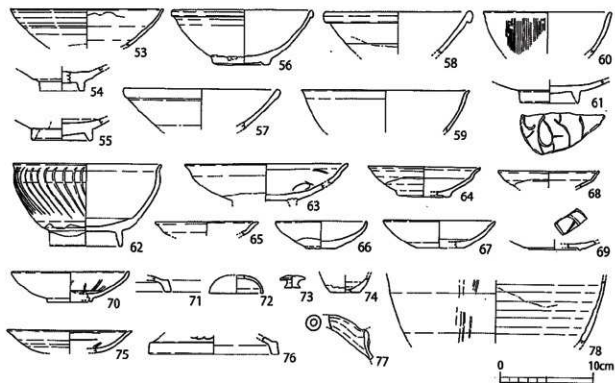
第1図 史跡出雲国府跡調査区配置図

(『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 史跡出雲国府跡 - 9 - 総括編』より転載)



第2図 石台遺跡出土陶磁器実測図

(西尾・広江 2015 より転載)



第3図 日岸出地区出土貿易陶磁器実測図

(『史跡出雲国府跡 - 9 - 総括編』より転載)

中世前期における越前若狭の輸入陶磁器

阿部 来 (勝山市教育委員会)

はじめに

中世前期の輸入陶磁器は、諏訪岡興行寺遺跡や厨海門寺遺跡、木崎遺跡といった重要事例が近年報告され、資料数が急増した(図1、表1)。今回は集成により様相を整理し、地域における拠点と流通について見通しを述べたい。

1. 出土傾向の整理

12世紀以前の輸入陶磁器は、白山平泉寺旧境内、豊原寺跡、厨海門寺遺跡、木崎遺跡、西繩手遺跡、加茂遺跡などから出土している。越州窯系青磁は、駅家である木崎遺跡、寺跡の可能性が高い鐘島遺跡のほか、福井城跡下層で報告例がある。今後、国府周辺の状況が明らかとなれば、様相が一変する可能性もあるが、この段階では輸入陶磁器はごく限られた階層の所有物といえる。

平安時代末から鎌倉時代の輸入陶磁器について、報告書に図示されたものを見ると、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱなどが多い。12世紀以降は、それ以前に比べ輸入陶磁器の量と種類が増加し、幅広い階層に受容されたことが明瞭である。また、同安窯系青磁の報告例は、平泉寺周辺や九頭竜川流域に多い。白磁四耳壺、青白磁合子、青白磁梅瓶、青磁酒会壺など食膳具以外の品々は、経塚のほか、拠点的な遺跡で出土している。

2. 地域の拠点と日本海流通

輸入陶磁器の出土量に注目すると、平泉寺では中世前期の碗皿類401点が出土し、時期別の内訳はC期:D期:E期:F期=52:129:127:93となる。また、白磁壺類103点、青白磁83(仏像・花生除)点をあわせると、中世前期の輸入陶磁器は計587点/5446㎡、㎡当たり0.107点となる。平泉寺周辺の集落である猪野口南幅遺跡では、碗皿類12点、C期:D期:E期:F期=2:2:6:2が出土している。青白磁梅瓶1点を含め計13点/1800㎡、㎡当たり0.007点である。

平泉寺の発掘調査は、石畳道や石垣といった中世後期の遺構面を保護することが前提であり、中世前期の状況を直接知ることは難しい。それでも、輸入陶磁器の出土量は、周辺の猪野口南幅遺跡、大渡西布遺跡、荒土杉原遺跡、三谷遺跡などの集落遺跡に比べて圧倒的に多い。平泉寺は、中世前期においても豊富な輸入陶磁器を所有していた。

また、流通という視点からは、厨海門寺遺跡や山田中世墓といった沿岸部の遺跡において、中国製陶器壺が出土していることに注目したい。これらは流通の副産物といえるものであり、小浜や敦賀を経由する日本海海運が経路として機能したことを示すのであろう。

おわりに

三国湊に近い東尋坊は、寿永年間の平泉寺僧に由来するとの記述が『朝倉始末記』にある。また、平泉寺には東尋坊跡、周辺には唐人坊田という地名が残る。これは日本海流通と寺社との関わりや、その担い手を示唆するものではなかろうか。さらに検討を進めたい。

*資料調査等でご配慮、ご教示いただいた赤澤徳明、岩田隆、鈴木篤英、中島啓太、藤本康司、宝珍伸一郎の各氏に感謝申し上げます。

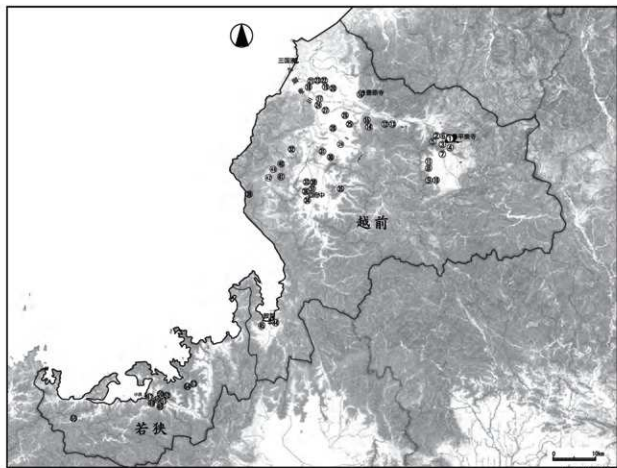


図1 遺跡位置図

【引用報告書】

- 1 福井県教育委員会 2011 『白山平楽寺遺跡－急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査－』
- 2 福井県教育委員会 2012 『白山平楽寺遺跡－急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査－』
- 3 福井県教育委員会 2001 『栗上・明科早稲跡』
- 4 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2000 『御野口南稲遺跡』
- 5 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 『大波布志遺跡 大波城山古墳』
- 6 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『志田神田遺跡』
- 7 福井県教育委員会 2013 『三谷遺跡
－福井市新体育館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
- 8 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『太田・小矢戸遺跡』
- 9 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 『太田・小矢戸遺跡』
- 10 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『下丁遺跡』
- 11 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 『下黒谷遺跡』
- 12 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『上古遺跡』
- 13 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1995 『尾毛見遺跡 下田遺跡 縄島遺跡 天山遺跡』
- 14 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997 『尾毛見遺跡Ⅱ』
- 15 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014 『堂山遺跡・谷口西谷古墳群』
- 16 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『轟遺跡』
- 17 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『京善善谷古墳群』
- 18 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『瀧島門前寺遺跡』
- 19 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1980～1985 『豊原寺1～6』
- 20 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『江留丁遺跡（境元町地区）』
- 21 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 『坂井兵庫地区遺跡群 2（遺物編）』
- 22 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『大阿蘇遺跡 上蔵加内遺跡』
- 23 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『若宮遺跡』
- 24 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 『大味地区遺跡群』
- 25 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 『大味上遺跡 大味中遺跡 下香袋谷遺跡』
- 26 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『大阿蘇遺跡 上蔵加内遺跡』
- 27 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001 『石蔵遺跡Ⅱ』
- 28 福井県教育委員会 2015 『石蔵遺跡Ⅱ』
- 29 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『竹方布志遺跡』
- 30 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『林・森島遺跡泉田地区 第1分冊（本文編）』
- 31 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『中角遺跡1～1区上層編Ⅰ』
- 32 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『坂井城跡－坂北路線外2両道線立体交差工事（高架道5号線）に伴う調査－』
- 33 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『小稲津遺跡』
- 34 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014 『養賢遺跡』
- 35 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 『市山遺跡（豆田地区）』
- 36 清水町教育委員会 1998 『越前・明古山塚等』
- 37 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『安太友人遺跡』
- 38 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014 『安太友人遺跡』
- 39 武市町教育委員会 2004 『御神遺跡』
- 40 今町教育委員会 1997 『F坂山古墳群Ⅱ』
- 41 越前市教育委員会 2013 『越前町御神遺跡・岡本山古墳群Ⅱ』
- 42 北陸中世史研究会 1997 『中・近世の北陸』 桂野房
- 43 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『御神明遺跡・野遺跡』
- 44 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001 『小倉石町遺跡』
- 45 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 『天字館山古墳群』
- 46 越前町教育委員会 2013 『越前町織田文化歴史館第8号』
- 47 越前町教育委員会 2006 『朝日山古墳群・佐々牛堂跡・大谷寺遺跡』
- 48 敦賀市教育委員会 2001 『御崎山古墳群御崎遺跡』
- 49 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『本崎遺跡』
- 50 福井県教育委員会・福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『石蔵手下遺跡発掘調査報告書 2』
- 51 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『御中石田遺跡 第1分冊（本文編）』
- 52 小浜市教育委員会 2006 『小浜市重要遺跡確認調査報告書 2』
- 53 小浜市教育委員会 2006 『小浜市重要遺跡確認調査報告書 2』
- 54 小浜市教育委員会 2004 『加茂遺跡発掘調査報告書』
- 55 小浜市教育委員会 2001 『小浜市重要遺跡確認調査報告書 1』
- 56 小浜市教育委員会 2001 『小浜市重要遺跡確認調査報告書 1』
- 57 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014 『曾根山遺跡』
- 58 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『黒川寺跡・下山古墳群』
- 59 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2028 『持明寺遺跡』

石川県（能登・南加賀）の中世前期の輸入陶磁器

熊谷 葉月（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

石川県内で、中世前期の土器・陶磁器の研究は1960年代から始められているが、輸入陶磁器については量的に圧倒的に少ないため、土師器や国産陶器の分類・編年に付随的に扱われてきた。集成としては1992年、1997年、2007年の北陸中世考古学研究会の集成が大きなものである。

筆者には、他地域の報告のような詳細な統計・分析が不可能なため、非常に雑駁になるが、近年の調査によって増加した資料を加えて、従来の研究によって示された様相に変化があるかを見てみることを試みた。今回は、能登（宝達志水町以北）と南加賀（白山市以南）を対象としている。

能登

11世紀～13世紀の輸入陶磁器資料は、白磁・青磁などが出土する遺跡は、今回確認した報告書掲載例は、20遺跡以上であった。調査件数の増加に伴い、確認例も増加しているものの、北加賀・南加賀などに比べ非常に少ない。出土量も数点と少なく、遺構に伴わず、包含層出土の例が多く、傾向としてもとらえにくい。能登国分寺・国府周辺や荘園関連、領主屋敷地、寺院・神社など宗教関連施設などが目立つようである。

ただし、南加賀、北加賀などを含め、他地域でも見られるように、白磁碗Ⅱ類、Ⅳ類が11世紀代にいくつか見られ始め、12世紀に入ると白磁碗Ⅳ類が急激に増加し、Ⅴ・Ⅵ類も見られるようになる。その後、青磁碗へとその主流が移っていく様相は同じようである。

南加賀

白山市以南は陶磁器が出土する遺跡数が非常に多いため、研究会での報告は、土師器皿などの共伴遺物から年代推定が可能な遺構のある21遺跡を取り上げた。遺跡の分布を見てみると、白山市松任平野周辺の荘園管理に関わるもの、小松市の国府周辺の関連遺跡、加賀市の城館跡など、大きく3つのまとまりが見られた。とりわけ、白山市については、北陸新幹線関連の調査により、資料の増加が目立ち、中世前期の荘園と管理者である地元領主層の存在を際立たせている。

研究会後、他地域報告の例にならない、太宰府編年を基に、宮保館跡・宮保B遺跡（2014報告分）の未実測を含めた白磁・青磁類304点について、集計したところ、以下の結果になった。

白磁碗										白磁皿										白磁
Ⅱ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	Ⅷ	不明	部	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅷ	不明	部	その他	
5	15	7	6	3	4	6	17	2	0	0	1	0	0	0	2	4	7	7	6	
1.64%	4.93%	2.30%	1.97%	0.99%	1.32%	1.97%	5.59%	0.66%	0.00%	0.00%	0.33%	0.00%	0.00%	0.00%	0.66%	1.32%	2.30%	2.30%	1.97%	

青磁碗									青磁皿				青磁	青白磁
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	不明	部	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	不明	その他
13	64	6	51	4	12	2	14	14	4	0	1	6	3	18
4.28%	21.05%	1.97%	16.78%	1.32%	3.95%	0.66%	4.61%	4.61%	1.32%	0.00%	0.33%	1.97%	0.99%	5.92%

※不（分類不明） 部（部武窯） 同（同安窯） その他（碗皿以外の器種）

まとめ

共存する土師器碗・皿類、陶器の大型品（貯蔵具）と関係において 北陸中世考古学研究会 1997 の中でまとめられているが、事例は増加しているものの、概要に変化はないものと思われる。以下、集成に示された陶磁器の組成図を抜粋・加筆したものを掲載する。

もう一つの特徴として、古代末以降の初期輸入陶磁といわれる越州窯や長沙窯の製品が比較的多く確認されていることである。これらの出土遺跡は、荘園管理施設など公的要素が見られる、地域の中では大規模な寺院と目される遺跡に多いことも挙げられる。これをⅠ期以前の時期としてあげることができる。

〇期（9世紀～11世紀前葉）

石川県内では、現在Ⅰの遺跡で初期輸入陶磁（越州窯青磁、長沙窯）が確認されている。

※能登国分寺跡、寺家遺跡、千木ヤシキタ遺跡（金沢市）、戸水C遺跡（金沢市）、横江庄遺跡（白山市）、北安田北遺跡、三浦遺跡（白山市）、安養寺遺跡（白山市）、白江梯川遺跡、佐々木アサバケ遺跡、浄水寺跡

Ⅰ期（11世紀中葉～12世紀中葉）田尻シンペイタン遺跡

ロクロ土師器（碗・有台碗・皿・小皿・柱状高台皿）

須恵器甕・常滑甕

白磁 碗・皿

Ⅱ期（12世紀後葉～13世紀中葉）

白磁 碗・皿・青白磁合子

ロクロ土師器（碗・小皿・柱状高台皿）・土師皿・土師器鍋

常滑甕・加賀（甕・鉢）・珠洲（甕・壺・鉢）・越前（甕・壺・鉢）

Ⅲ期（13世紀後葉～14世紀中葉）

青磁（碗・杯）・白磁皿

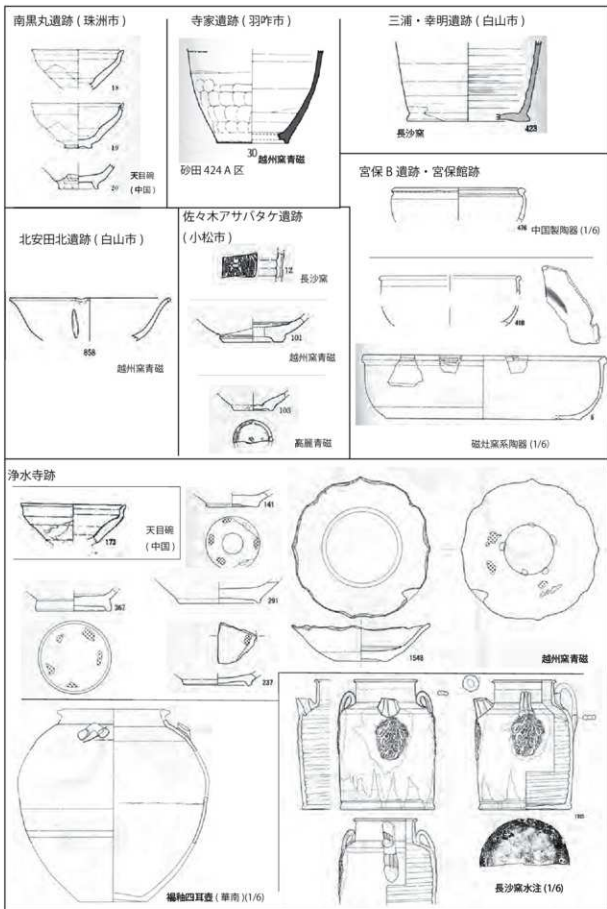
土師皿・土師器鍋

加賀（甕・壺・鉢）・珠洲（甕・壺・鉢）・越前（甕・壺・鉢）

筆者は、研究集会の準備のために、中世の陶磁器を今回ほぼ初めて扱うこととなった。この分野に詳しい方々に様々なご協力をいただいたにもかかわらず、かなり拙い報告となり、力量不足を痛感している。他地域の報告や討論で示された、最新の研究成果を基にした分類と統計の手法・分析方法などを今後の調査報告などに生かしていきたい。

【参考文献】

- 北陸中世考古学研究会 1991「城館遺跡出土の土器・陶磁器」
- 北陸中世考古学研究会 1992「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1993「貿易陶磁—奈良・平安の中国陶磁—」由良大和古文化研究協会
- 北陸中世考古学研究会 1997「中・近世の北陸—考古学が語る社会史—」
- 田嶋明人 1997「[5] 北陸」『国立歴史民俗博物館研究報告71 中世食文化の基礎的研究』
- 北陸中世考古学研究会 2007「中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品」
- 亀井明徳 1986「日本貿易陶磁史の研究」同朋舎出版
- 中世土器研究会 1995「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社



能登・南加賀の越州窯・長沙窯製品と青磁・白磁・青白磁以外の輸入陶磁器 (S=1/4)

北加賀における中世前期の輸入陶磁器

向井 裕知（金沢市文化財保護課）

1. はじめに

北加賀を対象とするが、輸入陶磁器が定量出土する金沢市域の事例から流通の様相を把握したい。

2. 輸入陶磁器の出土状況

輸入陶磁器の出土様相について、時期毎に概観する。なお、扱う範囲は、概ね平安時代後期の11世紀後半から南北朝時代の14世紀までとし、分類は主に大宰府分類を使用し、14世紀以降の青磁・白磁は上田分類・森田分類、天目は森本分類を用いている。

11世紀後半に白磁が登場し、12世紀前葉までは、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、青白磁などがみられる（大友西遺跡SD166、大桑ジョウデン遺跡SK02）。

12世紀中葉から後葉も引き続き輸入陶磁器は白磁が多い。また当該期には珠洲焼やてづくね土師器皿が組成に加わる（大桑ジョウデン遺跡SX301）。

12世紀後半には青磁が登場し、白磁は碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、皿Ⅶ類、青磁は龍泉窯系青磁などが共伴する。てづくね土師器皿は口縁部外面2段ナデのもので、珠洲焼はいずれもⅠ期の製品と考えられる（大友西遺跡SD165）。なお、当該期には同安窯系・龍泉窯系青磁Ⅰ類が共伴する。

13世紀前半は、てづくね土師器皿やⅠ・Ⅱ期の珠洲焼、龍泉窯系青磁Ⅰ・Ⅱ類、白磁が共伴する。

13世紀後半については1251年及び1263年の紀年銘木簡を伴う遺構が存在し（堅田B遺跡SD01）、13世紀第3四半期の資料と考えている。龍泉窯系青磁は碗Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、杯Ⅲ類、小盤Ⅲ類、酒会壺片が、同安窯系青磁は皿Ⅰ類がある。碗Ⅱ類（鎗蓮弁文・角高台）及びⅢ類（鎗蓮弁文・輪高台）が主体であり、Ⅰ類（劃花文）や同安窯系青磁は少なく、Ⅳ類は基本的に含まない。杯や小盤のⅢ類が定量あり、内底面に双鱼文をもつものがある。白磁は、皿Ⅸ・Ⅹ類、小皿Ⅹ類、小碗Ⅹ類、碗Ⅹ類、森田分類B群の皿がある。白磁は碗・皿ともにⅨ類（口唇部口禿げ）・Ⅹ類（薄手・内面型押文）が主体をなす。森田分類B群は混入であるか、初現が13世紀台に上がるのか判断が難しい。青白磁は、梅瓶蓋、梅瓶、合子蓋、壺がある。天目碗は、森本分類のⅤ-①類である。博多では13世紀後半に定量出土するが、他地域では出土例が少ない。未図化だが、耳壺C群もしくはⅣ類の耳部がある。輸入陶磁器は、大宰府時期区分のE期（13世紀前後～13世紀後半）・F期（13世紀中頃～14世紀初頭前後）が圧倒的に多く、遺跡全体でも同様である。国産陶器はⅡ～Ⅳ期の珠洲焼や加賀焼、越前焼、常滑焼、前Ⅲ期～中Ⅱ期の古瀬戸、瓦器は円形浅鉢や奈良産の小型羽釜・片口がある。

14世紀前半は、鎗蓮弁文を持つ龍泉窯系青磁碗（Ⅱ～Ⅳ類）、白磁皿Ⅸ類（口禿）、青白磁梅瓶、加賀焼（甕・鉢）、珠洲焼（鉢・甕・壺）、越前焼鉢などで構成される（中屋サワ遺跡）。

14世紀後半は、青磁碗B-Ⅰ・Ⅱ a・b類、D-1類があり、盤、細口壺、皿、鉢などの器種がある。白磁は皿、杯、瓶があり、皿Ⅸ類（口禿）も少量存在する（普正寺遺跡地山面）。古瀬戸は灰軸製品が主体で、珠洲焼はⅣ期製品が主体だが、Ⅲ期製品も存在し、加賀焼や越前焼などが共伴する。

14世紀後葉では、中国陶磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅱ b類、Ⅲ 2 c類、上田分類BⅡ・Ⅲ類や青白磁合子蓋、白磁が共伴する（堅田B遺跡SD11・12新相）。SD12からは、「康広元年（1389）」銘の可能性のある木簡が出土しており、年代を裏付けている。土師器皿の搬入品として、京都系土師器のGa-2タイプが1点共伴している。珠洲焼はⅣ期が主体であり、加賀焼はⅢ・Ⅳ期がみられるが、古相の資料に含まれる可能性がある。瀬戸は中期後半～後期前半の製品が共伴し、平碗や小壺小瓶、皿類、盤

類がある。また、灰釉天目らしき口縁部片も共存している。瓦器は小型片口が共存している。

3. 堅田 B 遺跡 SD01 資料からみた 13 世紀後半の遺物群について—まとめにかえて—

最後に紀年銘木簡共存資料として 13 世紀第 3 四半期の定点資料となる堅田 B 遺跡 SD01 資料の特徴を列挙し、まとめにかえたい。

- ① 紀年銘木簡 (1251・1263 年) と共存している。
- ② 青磁はⅡ・Ⅲ類が主体、Ⅰ類がごく少ない。Ⅳ類は含まない。同安も少ない。
- ③ 白磁はⅣ・Ⅹ類が主体、それ以外はごく少量。B 類を 1 点含むが、初現があがるかは今後の課題。
- ④ 青白磁梅瓶・壺・合子、青磁酒会壺、天目碗といった優品や中国陶器の耳壺を含む。
- ⑤ 珠洲焼はⅡ・Ⅲ・Ⅳ期が存在する。Ⅳ期資料についてはⅢ期に上がる可能性がある。
- ⑥ 漆器は黒色漆地に赤色漆絵を施した小皿と黒色漆地の椀があり、精製品が多い。
- ⑦ 土師器皿は全点でづくねであり、伊野分類の Cb タイプ、D タイプ、Jb タイプなどがある。
- ⑧ 産地不明の瓦質土器の火鉢、奈良産瓦質土器の小型羽釜・片口がある。
- ⑨ 古瀬戸入り前Ⅲ～中Ⅱ期に比定できるものがあるが、これは前期の範疇に収まるものといえよう。

ここで龍泉窯系青磁碗について述べてみたい。

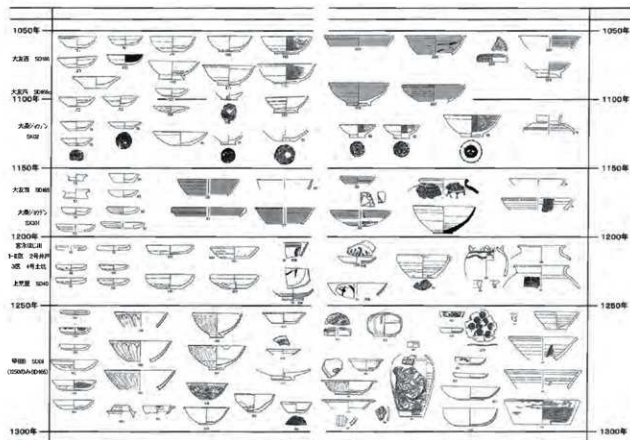
本遺跡は、紀年銘木簡などから、少なくとも 13 世紀第 2 四半期には成立すると考えているが、出土傾向からは、13 世紀第 2 四半期に龍泉窯系青磁碗Ⅰ類や同安窯系青磁碗がほとんど商品流通していない可能性を指摘できる。ただし、これより前から継続している遺跡については、以前からの所持品もしくは廃棄物として残っており、組成の一端を占めると思われる。さらに、SD01 資料は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類を含まないが、正応四年 (1291 年)～延慶三年 (1310) の紀年銘木簡を共存し、上層資料との間に約 1.5m の無遺物層があるために、良好な一括資料を提示できる新潟県馬場屋敷下層遺跡においては、数点の龍泉窯系青磁碗と白磁皿などが出土するが、青磁碗はⅣ類で構成される (山本信夫氏のご教示による)。つまり、Ⅳ類は 14 世紀を前後する頃から流通し始めるということがわかる。

また、鎌倉市の今小路西遺跡第 3 面の年代には諸説あるが、輸入陶磁器の組成が堅田資料と類似しており、今小路西遺跡の遺構年代を考える際にも有用であろう。

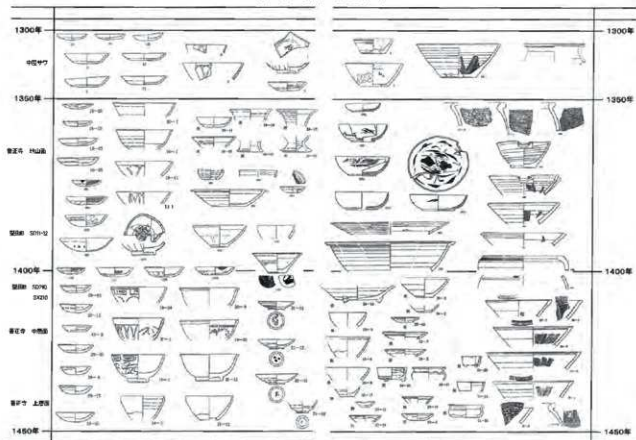
このように、都市遺跡のような遺物量はないが、一括性を考える際には単体の遺跡にこそ良好な一括資料が存在し、さらなる検証によって、より精度の高い陶磁器編年に迫れるものと考えている。

【引用・参考文献】

- 石川県立埋蔵文化財センター 1984 『普正寺遺跡』
金沢市教育委員会 1992 『金沢市中屋サウ遺跡』
金沢市 2002 『大友西遺跡Ⅱ (本文編)』
金沢市 2003 『大桑ジョウデン遺跡Ⅰ』
金沢市 2004 『堅田 B 遺跡Ⅱ (本文・遺物編)』
金沢市 2004 『大桑ジョウデン遺跡Ⅱ』
国立歴史民族博物館 1997 『国立歴史民族博物館研究報告』第 71 集
鶴巻康志 1997 『14 馬場屋敷遺跡』[中・近世の北陸] 北陸中世土器研究会
水澤幸一 2009 『日本海流通の考古学』高志書院
宮田進一 1995 『5. 北陸』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
向井裕知 2005 『金沢市堅田 B 遺跡出土の紀年銘共存貿易陶磁』『貿易陶磁研究 No. 25』
向井裕知 2005 『北陸』[中世窯業の諸相 資料集]
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』



第1図 食器の変遷 (1)



第2図 食器の変遷 (2)

富山県の中世前期の輸入陶磁器

越前 慎子 (公益財団法人富山県文化振興財団)

はじめに

富山県の輸入陶磁器については、各遺跡で出土した輸入陶磁器と土器・国産陶器との量比を算出し、その結果から遺跡の性格を検討する中で主に研究が進められてきた(北陸中世土器研究会 1992 他)が、近年の大規模な発掘調査により資料も増加している。小稿では、中世前期の輸入陶磁器が一定量出土した遺跡を対象として¹⁾、大宰府分類(太宰府市教委 2000)に則して再分類した上で個体数を比較し、平安時代末期から鎌倉時代頃の輸入陶磁器の出土傾向について検討した²⁾。

1 輸入陶磁器の数量と出土時期

分析対象とした輸入陶磁器の総数は 1,311 点である。遺跡別の数量としては、県南西部の梅原胡摩堂遺跡(304 点)が突出して多いが、県中央部の神通川流域に位置する任海宮田遺跡(209 点)・友杉遺跡(114 点)・中名遺跡群(107 点)も群を抜いている。輸入陶磁器の内訳については、富山県全体でみると中国製青磁が多く約 55% を占め、次いで中国製白磁が多く、中国製青白磁は 1割に満たない。しかし、遺跡別にみると県全体の比率とは異なる遺跡も多く、白磁が青磁を上回る遺跡が県西部(中世においては射水郡・砺波郡)に偏るといふ特徴がある。

富山県内の遺跡で輸入陶磁器が一定量の出土をみるようになるのは大宰府編年 C 期以降で³⁾、F 期に至るまで多様な種類の中国製磁器が出土している。青磁・白磁・青白磁の出土量を時期別に比べると、越中では概ね 11 世紀後半～12 世紀前半に白磁を主とした中国製磁器がもたらされ、12 世紀後半から 13 世紀前半には青磁が盛行し、13 世紀後半～14 世紀前半になると青磁が減少して白磁の量が回復し同等の比率になるが、しかし総数は減少する(第 1 図)。大陸においては、宋代は中国の陶芸が最も隆盛した時代であり、特に北宋期には精緻で優美な青白磁や白磁がつくられ、南宋期には龍泉窯をはじめとして青磁が大量に生産されて東アジア各地への輸出がますます盛んになったとされる。また、元代になると、宋代に栄えた各地の窯の多くは衰退または滅亡したとされ(藤岡 1990)、断交状態にあったことも相俟って日本への輸出量が減少したものと考えられる。越中における輸入陶磁器の流通の変化は、このような宋代から元代にかけての大陸の窯業の盛衰の影響を反映していると捉えられる。

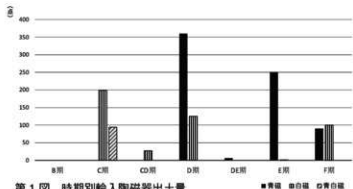
2 輸入陶磁器が出土する遺跡の特徴

各遺跡の時期別の出土傾向は、特殊な例を除くと、県西部(射水郡・砺波郡)に白磁の比率が高く C・D 期を中心とした古い時期を主体とする遺跡が集中し、中央部(婦負郡)には青磁が主体あるいは白磁をやや上回る程度で E・F 期を主体とする新しい時期の遺跡が多く、北東部(新川郡)には青磁の比率が高く県西部より若干遅れる D 期を中心とする遺跡が多い。

輸入陶磁器が多数出土する遺跡の多くは、水運に恵まれた場所に立地し、大溝に区画された大型の掘立柱建物群を中心とする集落跡で、文献史料に残る荘園に関連する可能性が高いとされている。越中国衙があった射水郡と、小矢部川の水運により国衙と結ばれる砺波郡には糸岡荘等の皇室領や石黒荘等の摂関家領が集中し、早くから開発が進んでいた。これに対し婦負郡・新川郡では幕府料所や幕府に所以のある寺社領が多く、南北朝期以降に初見される荘園が多い(深井他 2001)。輸入陶磁器の出土傾向は、このような荘園開発の動態と連動しており、交易に関わった在地領主層の盛衰を反映するものと考えられる。

輸入陶磁器の出土状況については、破損したため廃棄されたか、あるいは二次堆積によるもので元位置を留めないと考えられる溝・包含層等からの出土が大半を占めるが、意図的に埋納された例と

しては、円念寺山遺跡の経塚、中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の土壇墓がある。また、大量の土師器碗・皿による祭祀儀礼の跡とされる土器埋納土坑では、1点～数点の輸入陶磁器を伴う例が梅原胡摩堂遺跡・在房遺跡等にあるが、意図して埋納されたかは確証を得ない。



第1図 時期別輸入陶磁器出土量

※[CD期]は陶磁器の細分類ができなかったことによる[C期またはD期]の略。
[DE期]も同様。

注1 具体的には報告書に実測図が5点以上記載されている遺跡を対象とし、実測図をもとに分類を行った。

注2 紙幅の関係から数量データは割愛した。発表要旨・資料集を参照されたい。

注3 B期に遡る例としては、南太閤山Ⅰ遺跡から越州窯系青磁碗ⅠA 1a類が1点のみ出土している。

奈良橋原考古学研究所付属博物館編1993『貿易陶磁—奈良・平安の中国陶磁—』(財)由良大和古文化研究協会

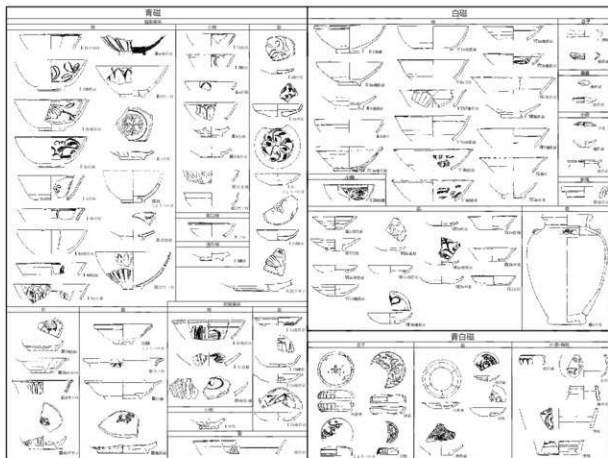
【参考文献】

太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』

深井甚三・米原寛他 2001 『ふるさと富山歴史館』富山新聞社

藤岡了一 1990 『中国陶芸史の概要』『東洋陶磁の展開』大阪市立東洋陶磁美術館

北陸中世土器研究会 1992 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』



第2図 富山県出土輸入陶磁器分類図

第1表 中世前期輸入陶磁器が出土した主な遺跡

遺跡名	所在地	出土遺物	特記事項
梅原塚遺跡	南阳市 (旧福光町)	整式建物・柱 穴・井戸・土坑・包含層	中世中には獨立柱建物181棟、井戸271基、大規模な区画溝跡のほか、土壘墓、火葬炉と推定される土器遺構、土師 埴輪・土師瓦等の特殊な遺構も存在する大集落で、12C中頃～16Cにわたる戦国北から南へと遷移する。石部遺跡より SK2456-2464では多数の土師製皿のほか青磁碗・白磁皿・青白磁皿が出土している。遺跡周辺は、三ヶ荘から南 なる内野宮前石屋荘(1078年頃成立)のうちの山田領という。地方豪族石屋氏の集落地であったと考え、当該跡は大正 遺跡北近隣の洞窟城主の居館であった可能性がある。
梅原加賀坊	南阳市 (旧福光町)	溝・土坑・包 含層	遺跡は16世紀のほか、溝・井戸跡がある。南東に区画溝1本あり、遺物は2人暮らし小邸に分けられ、それぞれ2～3期 間にかけて建て替えられる。13C～14Cの比較的大規模な区画溝の集落とされ、
在塚	南阳市 (旧福光町)	井戸・溝・土坑 包含層	11C後半～12C前半に獨立柱建物5棟、土器埴輪土坑2基等がある。埴輪土坑SX01では数枚ずつ重ねられた土師製埴 輪土皿25点と白磁焼の磁片1点が出土した。
院林	南阳市	溝・包含層	遺跡周辺は、内宮宗室石屋荘のうちの院林郷に属し、地方豪族院林氏(1211年初見・14C中頃)の本拠地であったとされ る。獨立柱建物の時期は12C後半～13C中頃で、大溝は14C中頃を下回ると考え、壘・段状等が出土したことから、 院林氏に関連する村落である可能性が指摘されている。
寺家崎寺跡	南阳市	不明	12C前半～13C初期の大溝ではほぼ方形の土師製埴輪・面が大量埋蔵されており、壘・段状等も存在する。中世前期の13C の遺構は、この他に14Cの大形土坑等がある。
北反瀬	小矢部市	包含層?	12C後半～14Cの築地敷と獨立柱建物跡があり、石清水八幡宮鎮座生保(1558年北宮宮司に初見)の一画とされる。
五社	小矢部市	柱穴・溝・包 含層	獨立柱建物は7群に分かれ、重なりが多い群では3～4期に分断される。建物規模は大中小あり、道路状遺構に近する建物 もある。区画溝は方形に近る部分もあるが、建物付近にはない部分もある。建物跡は中世前期後半が主体で12C後半に出現し、 13Cには各群が狭い、14Cには減少し、15Cにはほぼ消失する。埴輪・土師製陶器の埋蔵も可能性があるが、各建物群が 数十m間隔を開けており、集落形態としては散在型に近いとされる。
下巻子笹川	高岡市	溝・包含層	方形に近る大規模な獨立柱建物があるが、小規模なことから14C～15C前半を区画溝とする中世前期後半の遺構と見られ、溝 に付着遺物は少ないが、包含層の遺物は13C前半を1期として16C後半のV期まで一定量が出てはいる。
下巻子	水見町	柱穴・溝・土 坑包含層	丘陵部から前面にかけて、獨立柱建物・溝・井戸等がある。遺物は北東方向より一定量出てはいる。中世前期後半～後期前 半を占拠していると、近頃まで集落を有する。遺物が見出るのは丘陵上に土器が埋蔵され時期であるが、埋蔵物は不詳。 また、遺物は規模に大小があり、時期のわかるものは13C～14Cが主体である。木樋井戸あり、井戸蓋もみられる。 中世前期には灌漑用の池地が多量に遺される。
中尾新保内宮	水見町	井戸・溝・土 坑包含層	獨立柱建物は規模に大小があり、時期のわかるものは13C～14Cが主体である。木樋井戸あり、井戸蓋もみられる。 中世前期には灌漑用の池地が多量に遺される。
中谷内	水見町	包含層	獨立柱建物124箇所に数種ずつあり、2時期に分断される。遺物の年代は12C中頃～15C前半の時期があるが中心は14 Cである。
惣野野間	水見町	溝・包含層	13C～14Cの築地敷と獨立柱建物・区画溝・井戸等がある。中世前半の遺物は基礎が多く残る。井戸注(飯文書 1385年刊)と関連する可能性がある。中世前期の遺物は青銅人物がある。
岩井岡田島	高岡市	井戸・溝・土 坑包含層	東大寺御遺跡正(東大寺御遺跡正南面遺構一帯)の中継水田(御遺跡正南面759年刊)の北側の一帯であるが、直間(12C 後半～13C前半)、並間(13C後半～14C中頃)の3期に大きく分断される。
井口本江	高岡市	溝・包含層	獨立柱建物・区画溝・井戸等があり、井戸から完形の奈良朝土器が出土した。遺物は12C・13C～14C・16C～17Cの3 時期に分断される。13C～14Cに最も広範囲に展開するが、散在的な遺構の小集落とされる。
水上	射水市	井戸・土坑・ 包含層	獨立柱建物12C後半～14C、15Cの2時期に大きく分断される。後期には真直跡の大規模な区画溝が形成される。遺物は 13C～15C前半が主体で、種類別の構成比は殊異が高く土師製器が多いことから日常的な生活空間としての一般集落とされ る。隣接する大門地区は「吾妻鑑」1239年に初見の摂津丸家室跡の一つ、築地保とされ、関連する可能性もある。
受寄	射水市	溝・包含層	中世の獨立柱建物2棟のみであるが、井戸は12基あり特殊な形や土師製の木製品が出土している。
小倉中箱	射水市 (旧福中町)	井戸・土坑・ 包含層	中世の遺構としては、自然河川が埋没し土地が安定する12C中頃～後半までの築地敷が遺跡と考えられる範囲を有する。 初期に築地敷区画溝が構築され、14C前半には獨立柱建物に準拠施設と考えられる範囲を有する。
道場1	富山市	井戸・土坑・川 包含層	中世の集落11期(13C前半～後半)、2期(13C後半～14C前半)、3期(14C前半～後半)、4期(14C後半～15C前 半)、5期(15C中頃～後半)の5期に分断される。1期は土坑・溝・土坑・包含層とされ、2期以降は川・包含層とされる。遺 跡は遺物が多く、2期には平地式土器を有する。2期の土坑から花押の模本札が出土している。輸入陶磁器は東北北部の ものが多いが、南・元時代のものが多い。小鏡片の出土も認められるが、龍巻の型や磁器の玉目茶碗など一般 集落ではありありみられるものも出土している。徳大寺宮前寺跡(徳大寺宮前寺1354年初見)の一画とされ、壘や溝や大規 模な区画溝、倉庫、河川施設があることから、当該跡は花園の物流拠点であったと考えられている。
中名1・II・V・VI	富山市 (旧福中町)	土壘墓・井戸・ 井戸・溝・包 含層	中世前期の前期は13C中頃で、中世後期まで存在する。遺物は12Cのものもある。中世前期の遺構としては獨立柱建物・ 溝・井戸・土坑・溝・包含層・土壘墓・土坑・溝・包含層等がある。土壘墓 SZ1684では骨管ととも白磁の小遺物と考えられる。徳 大寺宮前河川の一画とされる。
待日	富山市 (旧福中町)	溝・土坑・川 包含層	遺物は中世前期と中世後半～近頃の2時期に大きく分断され、中世後期(14C～15C)には獨立柱建物12棟、井戸12基、壘 石基5基等がある。徳大寺宮前河川の一画にある。
南中田D	富山市	土坑・溝・包 含層	中世の獨立柱建物44棟が3期に分断されるが、遺物が少ないため相対的な埋蔵値が示されるにとどまる。獨立柱建物 は1期に土坑・溝・包含層とされ、時期が下ると小規模なものも増加している。徳大寺宮前河川の一画にある。
羽根下立	土坑・川・溝・ 包含層	土坑・川・溝・ 包含層	獨立柱建物は1期(12C後半～13C前半)、2期(13C後半～14C)、3期(15C～16C)の3時期に大きく分断される。 1期は区画溝と大形の柱建物で構成される敷材の形態で遺構は最も多い。2期には一部のみにより方に区画され、竊 城として利用される。遺跡南方に隣接する藤原社跡は、式内社・建立地(1190～1199年)には藤原朝を形成し、中世では 徳大寺宮前河川の荘官役割を要したとされ、当該跡は荘園の物流拠点のひとつと考えられている。
友杉	富山市	柱穴・井戸・溝・ 土坑・包含層	古代には「新」[新田]「馬打」[ウマカイ]等の遺土器が出土しているが、集落は10Cには一旦衰退する。中世には谷から 12C末～13C初期の遺物が多く出土し、扇・杵杖具等の木製品や土師製の土器も出土した。獨立柱建物13C～14Cが 中心である。木箱等に土師製土納めた竹筒が副葬されていた。徳大寺宮前河川の一画にある。
北野宮田	富山市	柱穴・井戸・溝・ 土坑・包含層	古代には「長良」[長良]「家」等の遺土器が出土しているが、集落は10Cには一旦衰退する。中世には谷から12C末～13C 初期の遺物が多く出土し、扇・杵杖具等の木製品や土師製の土器も出土した。獨立柱建物13C～14Cが中心である。 土師製の土納めに竹筒が副葬されていた。徳大寺宮前河川の一画にある。
水鏡金仏中馬場	富山市	柱穴・井戸・溝・ 土坑・包含層	集落規模は12C中頃～後半に開始され、13C～14Cを中心に展開する。獨立柱建物・区画溝・井戸等がある。古代には官 道クラスの施設が通っており公的施設や白岩川との水運と関係していたと考えられている。
神田	富山市 上町区	土坑・包含層	獨立柱建物は総柱建物で大小20棟あり、建物配置から1期前に3棟程度が6期に覆って存在したと想定されている。群 構を成らねたが同位置に長期に渡り建て替えられているため性格を持つ建物群と考えられる。遺物の中心は12C 後半で、13Cのものもある。
円念寺山	中新川郡 上町区	経塚	12C後半に石段屋根上に高置された経塚群。集石の下に板状の石片を積み合わせた階段または磚積み石の石段24基からなる。 埋蔵主体部分が完成していたのは6で、ほかにも納棺が残るものも多数、金剛鍔鍔石・銅網・銅釘・白磁・青白磁・ 土師製土師瓦等も出土した。3号経塚では、合計小鏡が約100枚埋蔵されている。13Cに遺構および土器により方に区画され、 8号経塚では集石から木杯が、13～2号経塚では小鏡・花冠土器が出土している。
じょうべのま	下新川郡 八雲町	不明	平安時代の住家跡(東大寺鎮座正北または東大寺鎮座正北)。中世には東大寺鎮座正北(大正年間1126～1131年初見)の一 画であった可能性が高く、獨立柱建物の年代は12C中頃～13C中頃で2期の遺構が出土していることから、大型建物に ついては荘官管理者の居住地であった可能性が高いとされる。
神田	下新川郡 朝日町	柱穴・土坑・溝・ 包含層	獨立柱建物は4ブロックに分かれ、それぞれ2～3群ずつにまとまっている。溝には建物を方形に区画するもののほか、1 ブロック間を2条が併走するものもあり、屋敷割りや区画線とも考えられる。遺物は少ないが12C中頃～14Cのものがある。 集落の中心は13C～14C。
竹ノ内II	下新川郡 朝日町	柱穴・土坑・ 包含層	山裾に9C～15Cにかけて築かれた集落で、中世は12C中頃～13C初期を1期として17期まで分けられ、13C中頃～14C 初期の前期が最も遺物が多く、集落の最大規模とされる。前期は埋蔵された竊城建物・銅網・銅釘・白磁・青白磁・ 土師製土師瓦等も出土した。3号経塚では、合計小鏡が約100枚埋蔵されている。13Cに遺構および土器により方に区画され、 8号経塚では集石から木杯が、13～2号経塚では小鏡・花冠土器が出土している。

新潟県における中世前期の輸入陶磁とその流通

春日 真実

はじめに－報告のねらいと目的－

新潟県内で輸入陶磁器が出土した主な遺跡について「1点出土面積」(調査(平)面積÷破片数)を検討する。第1表に示した遺跡には接合した破片は1とカウントする遺跡とそうでない遺跡が混在しているが、大まかな傾向は示すことができると考えている。分類は山本信夫 2010『大宰府坊条跡XV 陶磁器分類編』太宰府市教育委員会、時期区分は山本信夫 2010『貿易陶磁の編年・分類研究の現状と課題』『貿易陶磁器研究』30号 貿易陶磁研究会 を用いる。主にC期～F期を対象とするが、A期・B期の様相についても簡単に触れる。

1 A期・B期の様相

A期は阿賀野市山口遺跡(唐三彩)、糸魚川市角地田遺跡・上越市四ツ屋遺跡・新潟市大沢谷内遺跡・胎内市下町坊条遺跡(越州窯青磁碗・小碗)、上越市五反田遺跡・阿賀野市大坪遺跡(白磁碗Ⅰ類)、上越市至徳寺遺跡・村上市西部遺跡から輸入陶磁器(白磁皿Ⅰ類)が出土している。

B期は上越市至徳寺遺跡で白磁碗XⅠ類が出土している。A期と比較すると出土量は減少しているようである。

2 C期・D期の様相

C期はA・B期と比較すると輸入陶磁器の出土量が急増する。越後では国府周辺(上越市至徳治遺跡)、国津である蒲原津が存在した信濃川河口周辺(新潟市中央区山木戸遺跡)、城氏の拠点である阿賀北地域(阿賀野市大坪遺跡、胎内市下町・坊条遺跡)などで輸入陶磁器を多く出土する遺跡が確認できる。一方、平面積70㎡以上の総柱建物が存在し、比較的有力と推測する遺跡で1点出土面積が1,000㎡を超える例(上越市二反割遺跡)が確認できる。輸入陶磁器が多量に出土する遺跡とそうでない遺跡は中世の各時期に存在するが、当期はその差が特に顕著である印象を受ける。

なお珠洲Ⅰ期に先行する輸入陶磁器は、越後では少数と推測している。珠洲Ⅰ期以前の土師器皿と白磁の共伴例が定量ある上越市至徳寺遺跡を除き、他の遺跡から出土する白磁碗Ⅱ・Ⅳ類などの多くは、珠洲Ⅰ期以降に流通した可能性が高い(註1)。

3 E・F期の様相

E期は輸入陶磁器の出土量がさらに増加した可能性が高い。胎内市下町・坊城遺跡、新発田市住吉遺跡、同市二ツ割遺跡、新潟市北区下前川原遺跡、糸魚川市山岸遺跡では当期の輸入陶磁器が多量に出土している。下町・坊城遺跡、山岸遺跡は有力氏族の拠点、住吉遺跡・二ツ割遺跡・下川原遺跡は潟湖の周辺に所在し、日本海交通と内水面交通の結節点となる遺跡と考えている。

なお、E・F期の輸入陶磁器が多く出土した遺跡には滑石製石鍋を伴う場合があり、当期の輸入陶磁器の増加には九州北部との関係強化が推測できる(註2)。

結 び

A・B期は9遺跡で輸入陶磁器が確認できるが至徳寺遺跡を除き、単発の出土である。C・D期には輸入陶磁器の出土量(≒流通量)が大幅に増加し、E期には輸入陶磁器の出土量(≒流通量)がさらに増加した可能性が高い。C・D期からE期にかけて輸入陶磁器の出土量が増加する傾向は北陸に広く確認できる事象と考えるが、山陰ではC期に輸入陶磁器流通のピークがあったようで[山本2010]、同じ日本海側でも北陸と山陰では輸入陶磁器の流通状況に差があった可能性が高い。

市町村	遺跡名	破片数					面積 (㎡)		滑石石罫	備考	文献	
		白磁	青白磁	青磁	青花	その他	合計	調査面積				1点出土面積
阿賀野市 (安田町)	大坪遺跡	203	13	84	8	11	319	10,000	31	×	C・D期中心	県教委ほか 2006a
胎内市 (中条町)	下町・坊桑 遺跡 (A区)	29		36			65	2,833	44	×	C・D期中心	町教委 1997
新潟市 中央区	山木戸遺跡	57+	2+	26+			85+	2,097	25以下	○	C・D期中心、 実測個体数	市教委 2004
新潟市秋葉 区(新津市)	細池寺道上 遺跡Ⅲ	6		7			13	2,912	224	×	C・D期中心	市教委 2014a
上越市	至徳寺遺跡	520	54	145			665	30,000?	45	×	C・D期、面積 要検討	上越市 2003
上越市	用言寺遺跡	14+		9+	1+	1+	25+	6,700	268以下	×	C・D期中心、 実測個体数	県教委ほか 2006b
上越市	二反割遺跡	2					2	2,700	1,350	×	C・D期中心	県教委ほか 2012a
糸魚川市	伝極楽寺跡	20		17	1		38	2,585	68	×	C・D期中心	県教委ほか 2010b
出雲崎町	寺前遺跡	38	8	97	2	3	148	2,700	18	×	D期中心	県教委ほか 2008a
新潟市北区 (豊栄市)	下前川原遺 跡	16	20	145			181	1,899	10	×	D・E期中心	市教委 2004
新潟市秋葉 区(新津市)	沖ノ羽遺跡 V(市教委)	2	1	43			46	8,052	175	×	D・E期中心	市教委 2014b
新潟市秋葉 区(新津市)	沖ノ羽遺跡 Ⅲ(県教委)	1		16			17	6,100	359	×	D・E期中心	県教委ほか 2003
上越市 (鎭城村)	生仏遺跡	5		5		2	12	1,680	140	○	D・E期中心	村教委ほか 2004
新発田市 (紫雲寺町)	住吉遺跡	121	91	316		1	529	8,150	15	○	E・F期中心	県教委ほか 2006c
新発田市 (紫雲寺町)	ニツ割遺跡	90	80	350			520	4,100	8	○	E・F期中心	町教委 2004
新発田市 (紫雲寺町)	中住吉遺跡	10	5	30			45	3,900	87	×	E・F期中心	町教委 2004
新潟市南区 (白根市)	小坂居付遺 跡			13			13	4,300	331	×	E・F期中心、 面積は遺構集 中区	県教委ほか 2012b
出雲崎町	番場遺跡	7	4	37	3	1	52	4,400	85	×	D～G期中心	県教委 1987
阿賀野市 (水原町)	境塚遺跡 A 区(県教委)	10		46		1	57	5,000	88	○	E～G期中心	県教委ほか 2012c
阿賀野市 (水原町)	境塚遺跡 D 区(県教委)	3		15			18	2,300	128	×	E～G期中心	県教委ほか 2012c
阿賀野市 (水原町)	境塚遺跡 (市教委)	3	2	141			146	3,142	22	×	E～G期中心	市教委 2011
胎内市 (中条町)	下町・坊桑 遺跡 (D区)	66		44			110		38		C・D期	町教委 2005
		13		122			135	4,220	31	×	E・F期	
		62		153	22		237		18		G期以降	
糸魚川市	山岸遺跡	252	13	54			319		69		C・D期	県教委ほか 2012d
		105	107	655			867	21,940	25	○	E・F期	
		20		66	8	5	99		222		G期以降	

第1表 調査面積と輸入陶磁器破片数

【註】

註1 上越市用言寺遺跡 SE183〔新潟県教委ほか 2006b〕からは、C期の白磁が一定量出土したが、珠洲は伴っていない。珠洲の流通に先行して白磁を一定量保有していた越後では数少ない事例の1つとなる可能性が高い。出土した白磁の構成を見ると、広東産の白磁（Ⅱ類やXⅡ類など）が6点中3点を占めている。白磁Ⅳ～Ⅶ類が多い越後の他遺跡とは輸入陶磁器の構成も異なる。阿賀野市大坪遺跡は11世紀後半～12世紀前半の土師器皿が出土しているが、白磁の大半がⅣ～Ⅶ類であり、Ⅱ類・XⅡ類・XⅢ類は少ない。

註2 新潟市中央区山木戸遺跡はC・D期の輸入陶磁器が多く出土している遺跡であるが、滑石製石鏡が伴っている。山木戸遺跡からは13世紀の結水水溜を持つ井戸が検出されており、九州との密接な交流が推測できる〔水澤 2009〕

【引用・参考文献】

- 阿賀野市教育委員会 2011 「阿賀野市埋蔵文化財調査報告書第4集 塚塚遺跡」
頸城村教育委員会 2004 「全仏遺跡」
紫雲寺町教育委員会 2004 「紫雲寺町埋蔵文化財調査報告書第3集 ニツ割遺跡・中住吉遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
上越市 2003 「上越市史叢書8 考古・中・近世資料」
上越市教育委員会 1989 「四ツ屋遺跡発掘調査報告書」
豊栄市教育委員会 2004 「下前川原遺跡」
中条町教育委員会 1997 「中条町埋蔵文化財調査報告第12集 下町・坊城遺跡Ⅱ」
中条町教育委員会 2005 「中条町埋蔵文化財調査報告第33集 下町・坊城遺跡Ⅳ」
新潟県教育委員会 1987 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 番場遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2003 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集 沖ノ羽遺跡Ⅲ」
新潟県教育委員会ほか 2005 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第138集 台の上遺跡・船ノ上遺跡・互反田遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2006a 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 大坪遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2006b 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 用言寺遺跡Ⅰ」
新潟県教育委員会ほか 2006c 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第157集 住吉遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2008a 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第189集 寺前遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2008b 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第181集 田屋遺跡Ⅰ・宮の越遺跡Ⅰ」
新潟県教育委員会ほか 2009 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第191集 角地田遺跡・平遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2010a 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第206集 西部遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2010b 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第209集 前波南遺跡Ⅱ・伝極楽寺跡」
新潟県教育委員会ほか 2012a 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第236集 二反割遺跡・延命寺遺跡Ⅱ」
新潟県教育委員会ほか 2012b 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第238集 小坂付遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2012c 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第232集 塚塚遺跡」
新潟県教育委員会ほか 2012d 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第228集 山岸遺跡」
新潟市教育委員会 2004 「新潟市山木戸遺跡」
新潟市教育委員会 2014a 「細池寺道上遺跡Ⅲ 第26次調査」
新潟市教育委員会 2014b 「沖ノ羽遺跡Ⅴ 第18・19次調査」
新潟市教育委員会 2015 「大沢谷内遺跡Ⅳ 第19・20・21次調査」
水澤幸一 2009 「日本海流通の考古学—中世武士団の消費生活」
山本信夫 2000 「大宰府条坊跡XⅤ—陶磁器分類編—」太宰府市教育委員会
山本信夫 2010 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』30 日本貿易陶磁研究会

東北地方日本海側の中世前期の貿易陶磁器

高桑 登 (公益財団法人山形県埋蔵文化財センター)

はじめに

東北地方日本海側の貿易陶磁器出土遺跡を集成し分布図を作成した(図1・2)。集成は東北地方日本海側(青森県太平洋側を含む)の地域で、11世紀から14世紀(白磁XI類から白磁A群)のものを対象としている。集成にあたっては過去の成果(歴博1994,協会2001,青森県史2003,東北中世2003)を参考にし、山形埋文所蔵の報告書から近年の成果を追加している。個別の遺跡の一覧及び引用文献は研究集会資料を参照されたい。

各時期の様相

11～12世紀前半 白磁XI類は青森県太平洋側の大仏遺跡でのみ出土が確認されている。白磁碗II類は各地で点的に分布するがその量は少ない。津軽平野で白磁碗II類が比較的まとまって出土していることが注目される(図1-1)。

12世紀後半 IV・V・VIII類等の白磁碗は43遺跡で出土している(図1-2)。奥大道沿いの平泉関連遺跡周辺での出土が注目される。日本海沿岸部でも出土する遺跡が増加する。龍泉窯系I類、同安窯系青磁も同様の分布状況を示すが、津軽平野や大館・花輪盆地で出土する遺跡が減少している(図2-3)。

13世紀前半 青磁B1類は47遺跡で出土している(図2-4)。前代の白磁、青磁に比べ、外ヶ浜、大館・花輪盆地等の平泉遺跡関連遺跡周辺での分布が減少し、日本海沿岸部で増加する傾向が見られる。

13世紀後半～14世紀 白磁A群(IX類)は10遺跡、青磁III類は13遺跡と遺跡数が減少する(図2-5,6)。津軽平野で出土する遺跡が多いことが注目される。青磁III類は秋田県南部や山形県でも出土が認められるが、出土する遺跡は城館や寺院が多く、伝世品として出土している可能性もある。

地域毎の様相

青森県 蓬田大館遺跡や内真部(4)遺跡など、手づくねかわらけを出土する平泉関連遺跡とされている遺跡で、12世紀末に廃絶する遺跡が多い。一方で浪岡城跡や大光寺新城跡といった地域の拠点的な遺跡では13世紀以降の陶磁器も出土している。

秋田県 北部の大館・花輪盆地では矢立廃寺跡等、12世紀で廃絶する遺跡が多い。日本海沿岸部の能代・秋田平野では青磁碗B1類から出土し始める遺跡が多く、内陸部と対照的である。沿岸部では総柱掘立柱建物で構成される集落が目立ち、北陸からの影響も考えられる。南部の横手盆地、本荘平野でも北部と同様の傾向が認められる。地域の拠点的な城館である館堀城跡では12世紀から14世紀の陶磁器が継続して出土している。

山形県庄内・最上地域 庄内平野北部では拠点的な遺跡である大楯遺跡で12世紀から14世紀の陶磁器が出土している。南部では青磁碗B1類から出土し始める遺跡が多い。そうした遺跡でも手づくねかわらけが出土する。平泉とは別の論理で手づくねかわらけが導入されたと考えられる。

山形県村山・置賜地域 小田島城跡や高瀬山遺跡等、12世紀から13世紀にかけて継続する遺跡が多い。手づくねかわらけを出土する遺跡も比較的多い。

まとめ

11世紀から14世紀の東北地方日本海側の貿易陶磁器の分布について、時期、地域毎の様相を見てきた。特に12世紀末から13世紀前半にかけては、平泉藤原氏との関連が指摘されている遺跡及びその周辺の地域において、平泉の盛衰と連動した分布状況の変化が認められた。一方で日本沿岸部や東北地方南部では、12世紀から13世紀の陶磁器が継続して出土する遺跡や、13世紀代の陶磁器から出土し始める遺跡が多い。東北地方北部でも地域の拠点的な遺跡では同様の傾向が認められ、平泉との地理的、政治的な距離によって貿易陶磁器の分布状況が変化していると考えられる。日本海沿岸部で顕著に検出される総柱掘立柱建物からは、北陸からの影響も考えられ、手づくねかわらけの系譜とともに検討する必要がある。

【引用・参考文献】

青森県史編さん考古部会「青森県史 資料編 考古4 中世・近世」青森県

国立歴史民俗博物館 1994 「日本出土の貿易陶磁 東日本編1」国立歴史民俗博物館資料調査報告5

東北中世考古学会秋田大会実行委員会 2003 「中世出羽の諸様相-寺院・生産・城館・集落- 東北中世考古学会第9回研究大会(秋田大会)資料集」東北中世考古学会

日本考古学協会 2001 年度盛岡大会実行委員会 2001 「日本考古学協会 2001 年度盛岡大会研究発表資料集 都市・平泉-成立とその構成-」

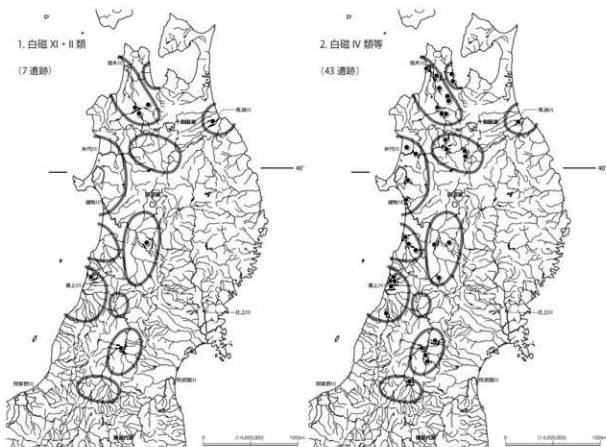


図1 貿易陶磁器分布図1

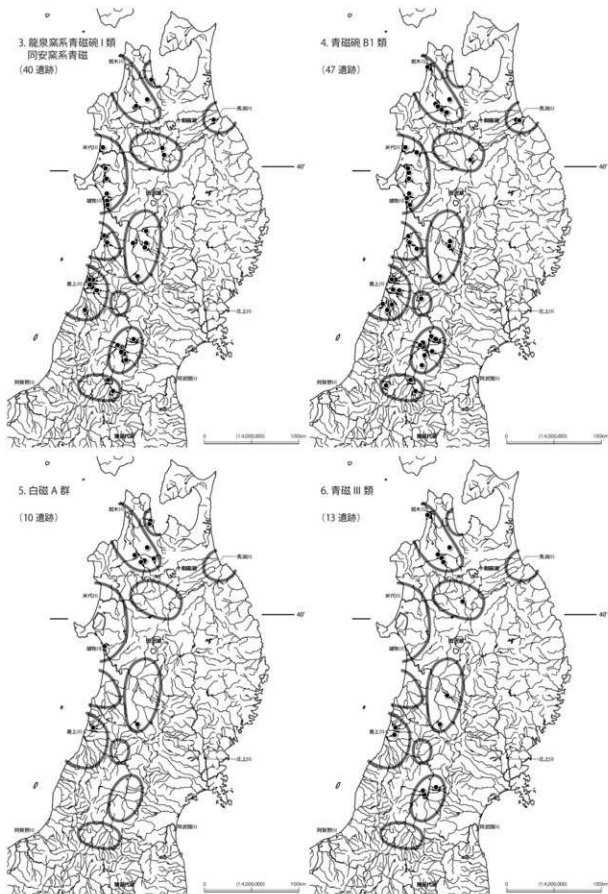


圖 2 寶島陶磁器分布圖 2

総括

大陸で生産された土器をはじめとする容器類が日本列島から出土する。それらを携えた人々の渡来があり、弥生時代や古墳時代では渡来人と言っている。かれらが持ち込んだこれらの器物ばかりでなく、青銅器、鉄器、還元焼成、乗馬・馬飼いの技術、土木技術など日本列島の社会に大きな影響を与えたことはよく知られている。大陸文化（換言すれば自分たちよりも進んでいる異文化）に対するあこがれや文物を手に入れたいという欲求が強く、この現象は弥生時代以来現在まで続いているだろう。今回の研究集会のテーマとして取り上げた初期輸入陶磁器もその一つである。

輸入陶磁器は奈良時代では都城を中心として唐三彩が出土しているものの、地方にあっては極めてまれにしか出土せず、石川県では国家的祭祀を行ったと推定されている羽咋市の寺家遺跡などで出土している程度である。しかし平安時代以降、律令支配体制の弛緩により、地方社会の中に流通するよ

第1表 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器年

紀年表	AD	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上段)		貿易陶磁器	半貿易陶磁器	
				灰物	緑釉			
⑥	800	V	A (A古)	狭谷O-10	武門? - 畿内	白磁I類 畿内系青磁II類 美濃系青磁・灰物 備前・備後	唐三彩・二彩 絞胎	
	825	VI		赤上段G-78	長門・陸奥(船 長)・(高麗K-14)			
	850	VII	A (A新)	藤岡S-4	丹波	青磁III類・青釉 器類イスラム陶器		
	900	VIII		黒坂K-90				
	925	IX	B	虎渡山I (新戸O-53)	近江	越前系青磁III類 白磁XI類		
	950			X	新戸O-53			
	1000	XI	C	東山H-72 (丸石2)		白磁III,IV,V,VI,VII類	初瀬系青磁系・阿波系青磁O類 瀬戸系青磁 初瀬系青磁LIII,IIII類 青白磁	
	1050	XII		丸石2 百代寺 東山H-105 藤岡S-1				
	②	1100	XIII	D			白磁IV, V, VI, VII類	白磁IV, V, VI, VII類
		1150	XIV					
1200		XV	E			龍泉系青磁III-1~4, 6, III類 阿波系青磁III-IV, III類	白磁III, IV, V, VI, VII類	
1250		XVI						
③		1250	XVII	F			龍泉系青磁III類 白磁IX類	龍泉系青磁III-5類 白磁IX類 黒釉陶器
		1300	XVIII					
	1350	XIX	G			龍泉系青磁IV類	白磁IX, C類 安南鉄胎	
1450	XX							
⑧	1500							

全国シンポジウム 中世窯業の諸相実行委員会 2005 『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』より転載

うになっていく。ちょうど在地の有力氏族が有力寺社門閥に寄進することで国家による搾取から自らを保全していく時代にあたり、蓄財していくのである。このような輸入陶磁器は、比較的入手しやすい奢侈品であり、中央貴族や寺社をはじめとして、地方の有力者たちが買い求めたと考えられる。この輸入陶磁器がどのような広がりがあるのか、どのような種類が出土する傾向にあるのか、それが時間的にどのように変化するか、などが主な問題意識であった。

発表では、主に平安時代後期から鎌倉時代という設定で、集成を通して陶磁器相の変化を確認することになった。陶磁器の器種分類や編年は山本信夫氏の研究をベースとしている。しかし、大陸との貿易の門戸となっている博多周辺における出土量が群を抜いており、博多に荷揚げされた輸入陶磁器が各地に流通することから、他地域の様相の標準として位置付けた。

討論の成果は第2表に集約することができた。平安時代から鎌倉時代にかかる11世紀後半から12世紀前半を境にこれらの種類が増加していることが明らかであり、この時期を一つの画期とみることができるだろう。濱野報告の山陰地方では、それまでは古代的権力のあるところに輸入陶磁器が入る傾向にあることから端的に知ることができるように、11世紀以降に台頭してくる領土層が力を蓄えてくる姿を示すものであろう。

田上報告で、博多湾周辺では、奈良時代から大陸貿易の拠点となっていた鴻臚館が11世紀の中ごろに廃絶したと考えられ、それ以降は博多遺跡群に移るようで、チャイナタウンが形成され、輸入陶磁器の出土量が增大するという。前述の画期はまた、貿易網の社会の変化も相まって、地方への急速な普及が予想される。それが13世紀には低調となり、貿易形態の変化が考えられた。

阿部報告の越前では日本海流通に寺社とのかかわりを示唆し、また越前報告の越中では水運にもかかわらずた荘園遺跡からの出土が目立つといい、交易とのかかわりを指摘している。さらに高桑報告では奥州藤原氏の平泉の盛衰と連動した状況が看取されるといい、日本海の交易実態が九州から東北まで、一様あるは一連の動きであったのではなさそうである。

資料見学会では、珠洲市南黒丸遺跡、七尾市上町カイダ遺跡、七尾市古府・国分遺跡、志賀町貝田遺跡、志賀町東小室ボガヤチ遺跡、志賀町矢駄アカメ遺跡、羽咋市寺家遺跡、金沢市戸水C遺跡、金沢市普正寺遺跡、白山市、米永ナデソオ遺跡、白山市宮保B遺跡・宮保館遺跡、小松市白江梯川遺跡、小松市漆町遺跡、小松市佐々木アサバタケ遺跡、小松市佐々木ノテウラ遺跡、小松市浄水寺跡、加賀市田尻シンペイダン遺跡から出土した輸入陶磁器を実見した。

(伊藤雅文)

第2表 地域別に見た出土輸入陶磁器の変遷表

	8-10世紀			10後半-11世紀			11後半-12世紀			12後半-13世紀			13後半-14世紀		
	青磁	白磁	その他	青磁	白磁	その他	青磁	白磁	その他	青磁	白磁	その他	青磁	白磁	その他
九州	越州I・II	I	長沙イスラム	越州II	瓷(前赤釉)		初期唐泉 同安 高麗	II, III, V	陶器 青白磁 高麗	龍泉I, II 同安	IV?, VII	陶器 青白磁	龍泉II, III	IX	
山陰	越州	I		?			II, IV, V	陶器	龍泉I, II 同安	II, IV, V		青白磁	龍泉II, III	IX	
福井	越州	I		?			II, III, IV, V	陶器	龍泉I, II 同安	IV, VII, VIII		青白磁	龍泉II, III	IX	
石川	越州	I	長沙イスラム	瓷			II, IV, V		龍泉I, II 同安	II, IV, V		龍泉 青白磁	龍泉II, III 同安	IX, X	陶器 天白 青白磁
富山	越州?						高麗(赤)	II, IV, V, VI	青白磁	龍泉I, II 同安	IX, IV, V, VIII		龍泉II, III	IX	
新潟	越州?	I	唐三彩	越州III	瓷		II?, IV?		龍泉I, II 同安	II, IV, V, VIII		龍泉	龍泉II, III	IX, X	
新潟	越州?(庄内)	I	唐三彩?	越州	瓷		II?, IV?		龍泉I, II 同安	II, IV, V		龍泉	龍泉II, III	IX	

石川県内遺跡出土ガラス資料の自然科学的研究①

－材質・製作技法からみたガラス資料の再検討－

関 晃史（(公財)石川県埋蔵文化財センター）

中村晋也（金沢学院大学）

1. はじめに

現在、石川県は他13県と共同で行う「古代歴史文化協議会」に参加しており、古墳時代の「たま」を通して、その流通と生産から当時の地域交流などについて研究している。この共同研究により、これまでに県内で出土している「たま」に再び着目し、再認識する機会を得た。本稿は、その一環として集成された資料のうち、8点のガラス質資料に対して蛍光X線分析及び顕微鏡観察を行い、それぞれの基礎ガラス材質、着色剤、製作技法を推定し、再検討を加えたものである。今回の科学分析を用いた玉類の研究については、今後も継続的に実施する計画であり、本稿はその最初の報告となる。科学分析については金沢学院大学の中村晋也研究室に依頼し、実施した。本稿を成すにあたり、主に1、2を関が担当し、3、4は中村が担当した。5、6については共同で検討し、関がまとめたものである。

2. 分析資料

対象とした資料は、金沢市畝田西遺跡群、小松市八幡遺跡、白山市横江D遺跡・野々市市二日市イシバチ遺跡、白山市五歩市遺跡から出土した第1表に示す8点である。各ガラス質資料が出土した遺構年代は、畝田西遺跡群SD08（古墳時代中期～後期）、八幡遺跡6号墳周辺（古墳時代初頭）、横江D遺跡・二日市イシバチ遺跡SI3（弥生時代後期後半）、五歩市遺跡A地区堅穴建物（弥生時代終末期）、B地区SI7（古墳時代前期前葉）、D地区SI9（弥生時代後期後半）である。

No3からNo8については、横江D遺跡・二日市イシバチ遺跡、五歩市遺跡の弥生時代後期後半から古墳時代前期前葉に比定される堅穴建物から出土した資料である。両遺跡は弥生時代後期後半～終末期にかけて、玉作りが盛んに行われていた遺跡であり、資料が出土した堅穴建物の多くも玉作り工房と推定されている（西田ほか2014）（安中ほか2014）。特に、No3、No8については「ガラス滓？」とされる資料であり、集落内におけるガラス製作の可能性を伺わせている。No4からNo7については、既に分析、報告が成されている資料であるが、遺跡の性格を裏付ける資料として併せて分析の対象とした。

また、No1、No2については、今回集成した資料の中でも際だって特殊な資料でありながら、分析が成されていないため、今回の分析対象に加えたものである。

第1表 分析資料一覧

No	遺跡名	出土遺構	遺物	法量				色調
				孔径 (mm)	小口面 最大径 (mm)	胴側面 最大長 (mm)	重量(g)	
1	畝田西遺跡群	河遺(SD08)	小玉	1.23	2.68	3.02	0.0333	赤褐色不透明
2	八幡遺跡	6号墳周辺(旧表土)	勾玉	2.31	13.98	6.50	1.0580	淡青色半透明
3	横江D遺跡・二日市イシバチ遺跡	堅穴建物(SI3)	ガラス滓?		19.02	9.37	1.4251	
4	五歩市遺跡	A地区 SI5(新)	管玉	2.09	5.48	6.74	0.1259	淡青色半透明
5		A地区 SI6	小玉	1.35	3.09	3.80	0.0340	淡青色半透明
6		D地区 SI9	管玉	1.81	6.35	8.43	0.1841	淡青色半透明
7		A地区 SI8	小玉	1.66	4.62	2.94	0.0801	淡青色半透明
8		B地区 SI7	ガラス滓?		17.89	10.12	2.2408	

3. 使用機器と測定条件

蛍光 X 線分析

資料の含有元素分析を目的に、蛍光 X 線定性分析を行った。使用機器は、エネルギー分散型微小部蛍光 X 線分析装置 SEA5230 (SII Nano Technology (株) 社製) を使用した。X 線の管球はモリブデン (Mo) である。測定条件は、励起電圧と測定時間を 15kV300 秒、45kV420 秒の 2 条件で行い、電流は自動設定、試料室内の雰囲気は真空とした。照射径は 1.8mm である。1 点の資料ごとに測定箇所を変え、2 箇所での測定を行った。

顕微鏡観察

ガラスの表面及び内部の気泡の状態を顕微鏡観察することで、「引き伸ばし管切技法」・「巻き付け技法」・「鋳型熔融技法」などの製作技法について推定を行った。気泡の配置や形状の観察には透過生物顕微鏡 (OLYMPUS XB5) を用いた。また、表面・孔壁面や形状の観察には実体顕微鏡 (OLYMPUS SZX7) を用いた。

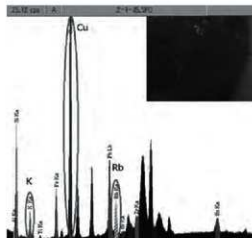
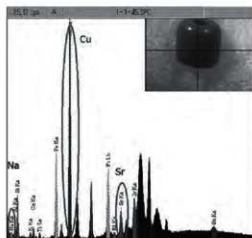
4. 蛍光 X 線定性分析結果

No.1 (写真1)

No.1 の蛍光 X 線スペクトルを第 1 図に示す。分析の結果、基礎ガラス材質に関係する主な元素として、Na (ナトリウム)、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Sr (ストロンチウム)、Zr (ジルコニウム) を検出した。主成分である Si のほかに融剤としての Na を検出しており、Ca と Sr と Zr の検出も確認できることから、No.1 の基礎ガラス材質は「ソーダ石灰ガラス」と推定できる。また、赤褐色不透明を呈する要因としては、Cu (銅) の顕著な検出から、「銅のコロイド着色」によるものと推定できる。銅のコロイド着色赤褐色不透明ガラスでは、胴側面に黒色の筋を持つ特徴が報告されており、一般的に「ムチサラ」と呼ばれる。No.1 はこの特徴にも一致しており「ムチサラ」であると考えられる。

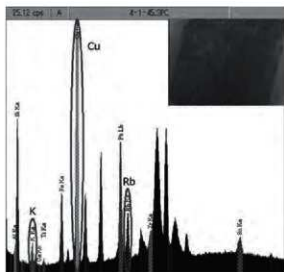
No.2 (写真2)

No.2 の蛍光 X 線スペクトルを第 2 図に示す。基礎ガラス材質に関係する主な元素として、Al、Si、K、Rb (ルビジウム)、Zr を検出した。融剤と推定される K の検出とともに、微量成分として Rb も検出されたことから、基礎ガラス材質は「カリガラス」と推定できる。また、Cu が検出されていることから、「銅によるイオン着色」によって淡青色半透明を呈していると推定できる。同時に Pb (鉛)、Sn (錫) の検出も確認されることから、これらが着色に関係している可能性も考えられる。



No.4～7 (写真4～7)

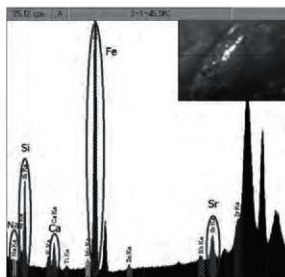
No.4～7の資料は同様の分析結果を得たため、代表してNo.4の蛍光X線スペクトルを第3図に示す。基礎ガラス材質に関係する主な元素として、Al、Si、K、Rb、Zrを検出した。融剤と推定されるKの検出とともに、微量成分としてのRbの検出があり「カリガラス」と推定できる。また、着色に関与するものとしてCuを検出したことから、4点とも「銅によるイオン着色」によって淡青色半透明を呈していると考えられる。同時に、Pb、Snの検出も確認されることから、これらが着色に関係している可能性も考えられる。



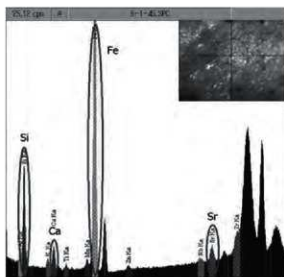
第3図 No.4スペクトル図

No.3、8 (写真3、8)

横江D遺跡・二日市イシバチ遺跡から出土したNo.3と、五歩市遺跡から出土したNo.8の「ガラス滓？」の蛍光X線スペクトルを第4、5図に示す。定性分析において、両者は極めて類似した結果を示した。検出された元素の特徴から「ソーダ石灰ガラス」と類似した波形を示し、Fe（鉄）の顕著な検出から、淡緑色の色味にはFeが関与している可能性が推定された。肉眼観察においても、資料表面にはガラス質と見て取れる光沢面をもっている。



第4図 No.3スペクトル図



第5図 No.8スペクトル図

5. 顕微鏡観察結果

No.1については、不透明であることから資料表面のみの観察となる。資料の側面には、孔と平行して伸びる黒色の筋が見られ（写真9）、銅のコロイド着色であるムチサラの特徴を確認した。また、孔壁が平滑であることから、ガラス塊を管状に引き伸ばして成形された痕跡と確認できた（写真10）。以上の観察結果からNo.1は「引き伸ばし管切技法」によって製作されたと推定できる。

No.2はガラス勾玉である。資料内部には大きな気泡が多く含まれており、精巧な作りとはいえない。孔壁の様子を観察したところ、肉眼で僅かな凸凹を確認できた（写真11）。これは鋳型熔融技法を用いた資料によくみられるもので、ガラス片の熔解が不十分であったことを示す。つまり、型に入れた

ガラス小片ごとに熔解の程度が異なり、熔けきらなかった小片が孔壁に突出したものと考えられる。以上のように、No 2については「鑄型熔融法」によって製作された可能性が高い。

No 5、7については一様に散在した気泡が見られた(写真12)。どちらの資料も内部の気泡列は確認できなかったが、孔と平行方向に長辺を持つ楕円形気泡がみられ、孔壁が平滑な特徴(写真13)から、「引き伸ばし管切技法」で製作された可能性が高い。特に、No 7では脈理と思われる気泡が引き伸ばし方向に伸びているものもあり、楕円形気泡が確認されたことを含めると「引き伸ばし管切技法」で製作されたと推定できる。

No 4、6については、No 4の破断面に両側からの穿孔による擦痕が確認できた(写真14)。一方、No 6に擦痕はみられなかったが、孔が直線に通らず、両側穿孔の結合箇所と思われる食い違いが確認できた。よって、No 4、6はともに両側穿孔されたものと考えられる。No 6に穿孔による擦痕が見られない理由は、用いられた穿孔具の材質(鉄または石)の違いによるものであろう。また、No 6の内部には穿孔方向と異なる方向に伸びる気泡列がみられた(写真15、16)。これにより鑄型熔融法による製作が考えられたが、石製管玉の製作と同様に穿孔が加えられていることを考えると、ガラス塊から角柱体を作り出し、その後、穿孔が行われた可能性も考えられる。

以上のように、今回得られた結果からNo 6に用いられた製作技法として以下の二つの方法が考えられる。「鑄型熔融法でガラス角柱体の製作→穿孔→研磨」と「ガラス塊→石製管玉と同様の手順で製作」である。ただし、どちらの方法についても確証は得られていない。

6. まとめ

基礎ガラス材質は、No 1がソーダ石灰ガラス、No 2、No 4、No 5、No 6、No 7の5点はカリガラスと推定した。製作技法については、No 1、No 5、No 7の3点が引き伸ばし管切技法と推定され、No 2は鑄型熔融法で製作された可能性が高い(第2表)。

第2表 基礎ガラスの材質・製作技法・着色剤の考察一覧

No.	基礎ガラス材質	製作技法	着色剤
1	ソーダ石灰ガラス	引き伸ばし管切技法	銅(コロイド)
2	カリガラス	鑄型熔融技法?	銅
4	カリガラス	不明	銅
5	カリガラス	引き伸ばし管切技法	銅
6	カリガラス	鑄型またはガラス塊→穿孔?	銅
7	カリガラス	引き伸ばし管切技法	銅

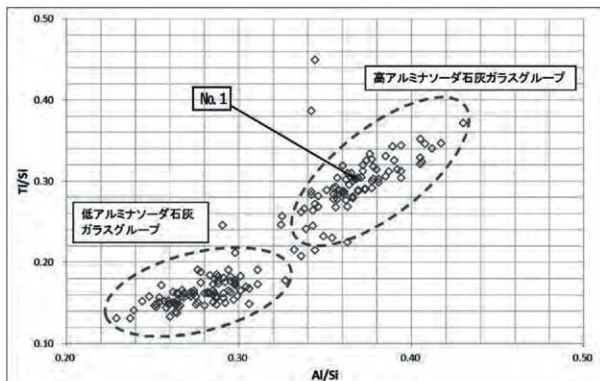
カリガラスと推定した資料5点はいずれも弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉の遺構からの出土しており、銅着色カリガラスの玉が日本で多く流通する弥生時代後期前葉～古墳時代前期前半の時期と矛盾しない(肥塚ほか2010)。

No 4、6のガラス管玉については、同様に穿孔を加えられたガラス管玉が弥生時代後期後葉に築造された福井市の小羽山30号墓から出土しており、その分類の研究も行われている(小寺2010)。No 4、No 6はともにカリガラス、穿孔といった特徴から大賀克彦の提唱するTY IV型に属する可能性が高い。TY IV型のガラス管玉は弥生時代後期前半に近畿北部地域に集中してみられ、古墳時代前期まで分布範囲を広げて伝世品が出土する傾向が明らかになっている。小羽山30号墓の資料についても伝世品として、この分類に位置付けられている(大賀2010)。

今回行った調査のなかでも特筆すべきものとして、赤褐色不透明を呈するNo 1のガラス玉が挙げら

れる。蛍光 X 線定性分析において Cu が顕著に検出し、胴側面には孔と平行方向に伸びる黒色の筋が見られた。これは、銅のコロイド着色を用いた「ムチサラ」と呼ばれるガラスの特徴と一致する。

また、No.1 の基礎ガラス材質はソーダ石灰ガラスと推定したが、肥塚隆保らの研究では銅のコロイド着色によるムチサラは、「高アルミナソーダ石灰ガラス」と細分している（肥塚ほか 2010）。ソーダ石灰ガラスの細分については、金沢学院大学中村研究室の原 佳佑が行った研究成果により、ガラス資料に対する定性分析の検出強度に基づいたソーダ石灰ガラスのプロット図が作成され、細分が行われている。そこで Al/Si・Ti/Si の積分強度比のプロット図に No.1 のデータを当てはめたところ、No.1 は高アルミナソーダ石灰ガラスのグループに含まれており（第 6 図）、肥塚らが指摘する「ムチサラは高アルミナソーダ石灰ガラス」という結果とも一致した。



第 6 図 Al/Si と Ti/Si 積分強度比プロット図（原 佳佑提供）

以上のことから、No.1 が「ムチサラ」であることは間違いない。日本でのムチサラの出土は弥生時代後期～終末期にかけて北部九州を中心に確認されており、古墳時代前期の空白期を経て、古墳時代中期～後期に再び北部九州から北関東周辺まで分布を広げて再流通する（肥塚ほか 2002）。No.1 が出土した SD08 の遺構年代から考えても、再流通時に持ち込まれたものとみて問題ない。

ムチサラの生産については、1 世紀頃までにコロイド着色技術を獲得していたインド及びその周辺地域で行われたと推定されている（肥塚ほか 2010）。それを裏付けるようにインドのアルカメドゥ遺跡からムチサラに関する未製品が出土しており、この地方がムチサラの起源だと指摘されている。また、日本においては福岡県南八幡遺跡と同県今宿五郎江遺跡から、ムチサラの未製品と考えられる管状の玉が出土している（肥塚 2004）。今回の再検討によって確認された No.1 のムチサラについては、日本海側東端での出土例として注目される。

「ガラス滓」の可能性があると分析した横江 D 遺跡・二日市イシバチ遺跡出土の No.3 と五歩市遺跡出土の No.8 については、蛍光 X 線分析の結果から、ガラス質物質を含む可能性が示唆され、2

点の資料がガラス製作に伴う“滓”である可能性はある。しかし一方で、表面及び内部には、多数の鉱物と思われる微粒が付着・内包しており、破面の観察、触感から資料内部は密度の低い粗鬆な状態である印象を受けた。これは、火山活動に伴う軽石状のものと類似しており、分析したガラス質部分は、いわゆる「天然ガラス」である可能性も意味している。いずれにせよ、ガラスであるかどうかは、ラマン分光分析やX線回折分析などによって、結晶構造をもつ物質かどうかを併せて検討する必要がある。資料を地球科学（火山・鉱物）の専門家の見解を踏まえて慎重に判断することが必要と考える。以上のように、横江D遺跡・二日市イシバチ遺跡、五歩市遺跡において出土した「ガラス滓？」については、今回行った科学分析の結果からガラス製作の所産と判断することはできず、今後の研究に繋げることとする。

謝辞

末筆となりましたが、本稿をまとめるにあたり金沢学院大学中村晋也研究室の原 佳佑氏、西由美子氏、安田有里氏には資料の分析から本稿作成に至るまでご協力して頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・肥塚隆保ほか（2010）「材質とその歴史的要因」、「月刊文化財 11月号（566号）」第一法規（株）
- ・福高雅儀（2006）「古墳時代ガラス玉の製作技法とその軌跡」、「考古学と自然科学 第54号」日本文化財科学会
- ・肥塚隆保（2004）「古代のガラスー最近の研究からー」、「科学が解き明かす古代の歴史 新世紀の考古科学」p144 - 152 松田國博、(株)クハプロ
- ・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター（2006）「古代のガラスー考古学的な調査・研究からー」埋蔵文化財ニュース 第124号 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
- ・肥塚隆保ほか（2002）「弥生・古墳時代の Mutisalah に関する考古学研究」日本文化財科学会 第19回大会研究発表要旨集 日本文化財科学会
- ・西田昌弘ほか（2014）「白山市 五歩市遺跡」石川県教育委員会、(公財)石川県埋蔵文化財センター
- ・安中哲徳ほか（2014）「白山市・野々市市 横江D遺跡・二日市イシバチ遺跡 横江D・郷クボタ遺跡」石川県教育委員会、(公財)石川県埋蔵文化財センター
- ・浜崎悟司ほか（1998）「八幡遺跡Ⅰ」（社）石川県埋蔵文化財保存協会
- ・浜崎悟司ほか（2005）「畝田西遺跡群Ⅱ」石川県教育委員会、(財)石川県埋蔵文化財センター
- ・宮田進一ほか（2006）「下老子能川遺跡発掘調査報告」（財）富山県文化振興財団、埋蔵文化財調査事務所
- ・大賀克彦（2010）「弥生時代におけるガラス製管玉の分類の検討」『小羽山墳墓群の研究』福井市立郷土歴史博物館
- ・小寺智津子（2010）「小羽山30号墳出土のガラス製品ーその様相と地域間交流ー」『小羽山墳墓群の研究』福井市立郷土歴史博物館
- ・田中光浩（1984）「扇谷遺跡発掘調査報告書」峰山町教育委員会
- ・物部茂樹ほか（2009）「百間川今谷遺跡4」国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会



写真 1 No.1



写真 2 No.2



写真 3 No.3



写真 4 No.4



写真 5 No.5



写真 6 No.6



写真 7 No.7



写真 8 No.8

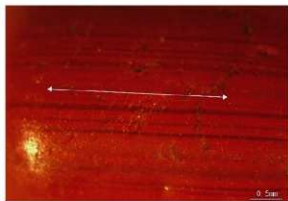


写真 9 No.1 弱側面の黒色の筋



写真 10 No.1 孔壁



写真 11 No.2 の孔壁の凸凹



写真 12 No.5 散在した気泡



写真 13 No.5 孔壁

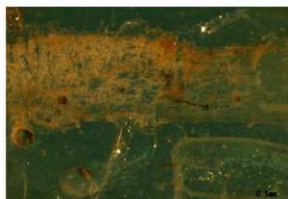


写真 14 No.4 両側穿孔結合箇所

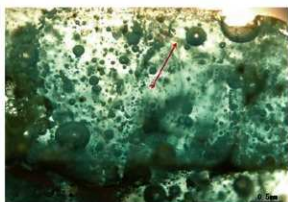


写真 15 No.6 穿孔方向と異なって伸びる気泡列



写真 16 同左拡大

石川県埋蔵文化財情報
第 35 号

発行日 2016 (平成28)年3月18日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 鶴川印刷株式会社

© (公財) 石川県埋蔵文化財センター

